

# 「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2023」 (中国語版)

## 入賞作品

## 目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」(日本語訳) 一等賞作品	
復旦大学 マルクス主義学院 修士3年	邓爱…………… 3
寧波大学 人文メディア学院 中国語文学 修士1年	潘俊杰…………… 5
南開大学 外国語学院 3年	王奕博…………… 8
北京大学 哲学系 中国哲学 3年	王敬淇…………… 11
南京工業大学 法政学院 行政管理 1年	楊東林…………… 13
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」(中国語原文) 一等賞作品	
復旦大学 マルクス主義学院 修士3年	邓爱…………… 16
寧波大学 人文メディア学院 中国語文学 修士1年	潘俊杰…………… 18
南開大学 外国語学院 3年	王奕博…………… 19
北京大学 哲学系 中国哲学 3年	王敬淇…………… 21
南京工業大学 法政学院 行政管理 1年	楊東林…………… 24
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」(中国語原文) 二等賞作品	
蘇州大学 文学院 修士3年	杨帆…………… 26
蘇州大学 医学院 2年	杨钰晗…………… 28
浙江越秀外国語学院 インターネットコミュニケーション学院 4年	林文博…………… 29
吉林外国語大学 中東欧言語学院 3年	肖峰…………… 31
北京大学 法学院 修士2年	李想…………… 33
マカオ大学 人文学院 2年	王辰月…………… 35
華東師範大学 中国言語文学科 1年	許馨月…………… 37
上海交通大学 文化創造産業学部 修士2年	常竣斐…………… 40
中国伝媒大学 広告学院 1年	劉子熙…………… 42
浙江越秀外国語学院 東洋言語学院 3年	边筱悦…………… 44

# 「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」

(中国語版)

一等賞作品

(日本語訳)

## 自然と人：稲作文化における生物多様性保護の道

復旦大学

マルクス主義学院 修士3年

邓爱

稲は生命の続きであり、食糧の源であり、そして人と自然との融合の証人です。

時間の長い流れの中で、ある文化がちょろちょろとした流れのように、日本の大地を流れています。人と自然が共生する知恵を載せたその流れこそ、稲作文化です。稲作文化は日本の農業の伝統の重要な構成部分であり、日本の文化と生活様式を象徴するものでもあります。この稲作を中心とする文化体系の中で、自然と人との関係が具現化されるとともに、持続的発展が可能な生物多様性保護の道も示されています。

人類学者の大貫恵美子さんに『コメの人類学 日本人の自己認識』という著書があり、その中で稲作の日本の文化における独特な地位を探求しています。同書では歴史文献、民俗学資料の研究を通じて、稲作文化の日本で変遷してきた過程が示されています。古代の神話の伝説から近代農業まで、皇室から民間まで、祭祀から他の習わしまで、稲がきわめて重要な役を演じているのです。この本を開くと、まるで時間の長い回廊を通り抜けて、古い日本に歩み入るかのようです。そこでは、時間がきめ細かい手がかりのように、古今を通じて人々の稲作に対する探求と伝承を貫いています。稲作の背後にある歴史は不朽の詩で、日本人がその土地と付き合って奮闘してきた歴史を記録したものです。時代ごとに勤勉な耕作の足跡を残し、稲作文化の伝承する強靱な意志も作り上げた大作です。

稲作文化の日本での歴史は、古代の深遠な年月までさかのぼることができます。水稻と栽培技術が中国から伝来すると、日本の各地で栽培が始まりました。日本人の生活様式が採集と狩猟から農耕へと転換し、人々が山林から低地、河川の傍へと移動して、独特で豊かな稲作文明を形成したのです。

稲作は日本の文化の中で崇高な地位を占め、一族の伝承する宝と尊ばれました。米を好む日本人は、米を材料とする「ご飯」の飲食方式を身につけました。米は複合炭水化物、蛋白質、脂肪などの栄養成分に富んでおり、人が必要とするエネルギーの重要な供給源です。また健康の維持にきわめて重要なビタミン、ミネラルも豊富です。米を主食とする飲食様式は日本人の長寿と健康の秘訣の一つとも考えられています。

稲作文化の伝承は生活様式にとどまらず、ある種の生態の倫理の延長でもあります。米は日本人の主食として、彼らの生活感と文化的アイデンティティを背負っています。栽培から収穫まで、炊事場から食卓まで、一本の生態系の鎖が通っており、人、土地、食品をしっかりと結びつけています。穀物の豊作は人々の衣食の需要を満足させるだけではなく、重要な祝日や儀式に深く焼き付きました。初夏に田植えし、夏には田んぼでカエルが鳴いて、秋に稲穂が熟し、冬には餅つき。諸神の祭祀が稲作と強く結びついています。豊年祭、稲荷祭などのお祭りで、人々は大地に感謝の思いを表して、自然の恵みに対する敬慕の念も見せます。米は単なる食物ではなく心のよりどころであり、人々の豊作、幸福と生活の安定に対するあこがれが載っています。

稲作文化の伝承には豊かな知恵が含まれています。伝統的な稲作文化の中で、農民達は繁雑な農作業を通じて自然と融け合い、自然の法則に適応した農業技術と管理方法を形成しました。彼らは注意深く天候の変化を観察して、土地の声に耳を傾け、自然の法則によって農作業を行います。時期を選んでの田植え、灌漑の把握、水位の調節などです。彼らは合理的に水資源を利用し、湿原の生態系のバランスを維持する方法を理解しています。どのように輪作や休耕を行えば、土地の肥沃さを維持して、土地の極端な消耗を防げるのかも知っています。耕地を一つの自給自足した生態系にしたのです。こうした人と自然の関わり方には深い生態系との共生の観念が反映されているため、人が生態系の破壊者とならずその一部分となって、共に自然の生態バランスへと関わっていきます。

稲作文化は耕地の生態系に影響するだけではなく、農業全体の生態系の保護を積極的に推進する働きもしています。伝統的な稲作文化において、人々はよく稲を他の農作物と結び合わせ、多様化した農業の生態系を形成してきました。水稻、魚類、昆虫などの多種の生物を含んだものです。田んぼは良好な生活環境を提供しています。田んぼの水は植物の根系を通して効果的に吸収され利用されるだけでなく、水質の浄化により水体の生態の健康を高めることもできます。稲の根は土壌に深く入り込んで、土壌微生物に生息地を提供します。稲わらは昆虫達の郷里になり、水中では多くの魚類が繁殖して生存し、生態連鎖の見事な楽章を形成します。この湿地の生態系の存在により、たくさんの稀少種の生息地が保護され、生物多様性がその土地で継承され繁栄していくことができます。田んぼは農

民達の働く場所であり、虫、魚、鳥獣が生息し繁栄する天国でもあります。稲作文化は花冠のように、各種の生物を一つに編み込んで、和やかに共存させます。

日本の土地で、稲作文化は古くて神秘的な絵巻さながらに、延々と続いて、人々の心の深くに根を下ろしています。稲作は生命の恵みだと見なされ、豊饒とめでたいことを象徴しており、母なる大地の惜しめない贈り物です。農村で鼻をくすぐる稲の香りは、人と土地の共生共栄の叙事詩を歌う自然の歌のよう。稲を植えて、刈り取って、実り多い成果を楽しむ営みは、単なる農作業ではなく、ある種の生活の儀式、自然への感謝なのです。稲作は日本人が心のよりどころとする象徴になり、過去、現在、未来をつなぐ時空の絆。

日本の稲作文化の中では、人が自然と共生する知恵を感じられ、人が自然と付き合う中で体得した哲学の思考も見られます。稲作文化は農業の発展というだけではなく、生命の詩、人が自然と共作した叙事詩であり、持続的発展が可能な生物多様性保護の道を提供してくれます。この土地で、稲作文化は感動を呼ぶ楽章のように、人と自然が和やかに踊るビジョンを呼び起こします。私たちはこのメロディーの中で軽やかに舞って、生態系との共生の精神を伝承し、生物多様性の新たな章を引き続き作って、自然と共に歌うのです。

読んだ書籍：大貫恵美子『コメの人類学 日本人の自己認識』、石峰訳、商務印書館 2015年版。

## 美しきものはそれぞれに美しく、共存しうる ——本川達雄『生物多様性』を読んで

寧波大学

人文メディア学院 中国語文学 修士1年

潘俊杰

本川達雄の科学読本『生物多様性』を読んで、費孝通の箴言「美しきものはそれぞれに美しく、共存しうる」を思い出し、「人類」と「生物多様性」の密接な関係に再解釈するのがとりわけ適切そうです。

同書は『生物多様性』と銘打って生物の進化、遺伝の進化など生物の多様性を理解するために必須の知識を分かりやすくまとめているだけでなく、倫理学の視野と融合して価値

判断を行う「私」の定義を論理的に探求しています。内容が精確で、科学読本としての機能と哲学性を兼ね備え、読者に生物多様性の豊かさを味わわせる本だと言えます。

アルベルト・シュヴァイツァーの名言、「世界を感じてこそ世界とつながる」のようです。書中で本川達雄は文字の力を借りて、知識を例証に融合させ、色とりどりの生態の世界を読者に開け放した。色とりどりの生態の世界を読者に開け放しました。

相利共生の不思議には驚嘆せざるを得ません。イチジクコバチとイチジクの受粉という共生や、樹木と菌根菌の栄養を介した共生などです。こうした相互に依存し「共存しうる」生物の関係は、生物に共に進化することを促し、生物多様性をきわめて豊かにしています。

最も印象に残っているのは、生物共生の最高傑作に数えられるであろうサンゴ礁です。サンゴ礁は栄養の乏しい熱帯の浅い海に分布していますが、海洋の中で最も豊かな生態系になっています。この奇観は、サンゴと褐虫藻の共生と切り離せないものです。サンゴは褐虫藻に対して至れり尽くせりだと言えます——栄養の不足？褐虫藻は「地産地消」で、細胞内にサンゴの排泄物を吸収して窒素、リンを得ています。二酸化炭素不足？褐虫藻は「ご近所のよしみ」を利用し、その場でサンゴの吐き出す二酸化炭素を光合成に用いています。住処の必要？サンゴは褐虫藻の快適性のため、わざわざ自身の構造を木の枝のように分かれた形に変化させているのです。その形により光を受ける面積が広がって褐虫藻が十分に日差しを浴びられるうえ、紫外線をカットするフィルターとしても働き、褐虫藻の葉緑素が壊れるのを防いでいます。褐虫藻も食物と酸素をサンゴに見返りとして提供しています。

ここから、この両者は資源の限られた環境の中で、効率のよい共生を通じて、資源の循環利用を実現していると分かります。「人類の生存の手本」と呼べるものです。しかし、この見事な生態系は、気候の温暖化、海水の富栄養化によって危機に陥っています。1980年代に空前の大規模な白化現象が起り、毎年5%~20%のサンゴ礁が脅威を受けています。

そして生態環境が悪化して、生物多様性が激減するのは、すべて人類の「功利主義」、そこから利益をかすめ取る行為のせいです。「生物多様性条約」の前文を解説してみると、人類が生物多様性を評価する二種類の価値観が得られます。一つは内在価値論で、生物の「存在そのものに価値がある」という考えですが、この観念は「自然を畏敬する」道徳のハードルが高く無力そうです。もう一つは手段価値論で、「人間中心主義」に従って、自然を道具として扱うものです。こちらが目下の主流となっており、本川達雄もここを出発点として根本を探求し、人の定義——「私」とは何かを再評価することにより、「生物多様性がどうして重要なのか」を述べています。これは全書で最も深く考えさせられることだと言えます。

この複雑な問題と向き合って、作者は「生物の永続」という高い目標を大前提に、論理的探求を展開することを選びました。彼は初めにリチャード・ドーキンスの「利己的な遺伝子」理論—「遺伝子」を複製機能の乗り物とみなし、複製の偏りを認め、わずかな違いのある「個体」を「同一のもの」とみなす—に基づいてヒトの繁殖過程での遺伝、変異に新たな解釈をしています。ミクロの遺伝子にとって、「私」と完全に同じ遺伝子の序列は再現不可能であり、「私」は古今を通じて唯一無二の存在です。マクロの個体にとっては、過去の祖先から未来の後輩まで、内部の遺伝子の違いはきわめて小さく、いずれも絶えず延々と続く、永遠に消えない「私」と見なせます。ここから、「私」は永遠に二つの二律背反する矛盾—結局は死ぬことと永久に消えないことの矛盾、唯一無二と絶えざる複製の矛盾—の中にいると言うのです。

「私」がこのように矛盾だらけだとした上で、作者ははっきりと「私」の範疇を改めて拡大し—「時間の上でも空間の上でもまわりと切れてはおらず」後代、環境を含めています。「私」の周辺の事物の多様性をはっきり見分けるには、先に自身の内部の多様性から着手しなければいけません。

生、老、病、死……こうした個々の生命の中で嫌悪されるところも避けるべきではなく、生命の中の多重の形態として「私」の一部分を構成し、生命の継続を助けています。そのため、「私」の周囲のあらゆる事物に直面して、一方的な「多様観」で簡単その存在の価値を否定してはいけません。「好み至上主義」への偏向を放棄し、貨幣経済の目からの「物量主義」を是正して、「都合がいいものも悪いものもあってこそ多様」、「それぞれ異なっている物事の多様な存在こそ豊かさだ」という観念を受け入れなければ、物事の多様性の中から豊かな「私」を探し出すことはできません。

「私」と「多様性」に対する区切りと価値の判断があれば、「どうして生物多様性を保護するべきなのか」の答えが真に迫ってきます。生命が続くという至高の目標を「私」が実現するならば、生物多様性は必要条件です。時間を見渡して、「生物学の世代間倫理」によると、子孫後裔も「私」の継続であり、生物多様性を保護することは、生存のよりどころとする環境を後代の人に残しておくことです。空間を見渡すと、ヒトの「人」たるゆえんは、多様な生物の発生と結びつき、自分に取り込むからであり、それでこそ豊かになるのです。

古くは『創世記』の中で、「ノアの方舟」神話を引いて「生物多様性」の重要さが明示されています。いまどきになって、人類はかえって「目先の利益ばかり考えて将来を考えず」、あまりにも利己的なため、生物多様性の激減を招いています。このままでいけば、永続はでたらめとなり、後世の「私」も環境との断絶により「失格」となります。

平安な中にも危難に対する備えを考え、本川達雄は「次世代も環境も〈私〉だとみならず、時間的にも空間的にも広い利己主義にすれば、まわりとも未来ともつながった豊かな己を実現できる。そして〈私〉も社会も永続できる」と呼びかけています。積極的に生物多様性を保護することは、人類の存続に関わる大計です。「美しきものはそれぞれに美しく」、「多様性」を尊重し、生物に存在する固有の価値を肯定して、「共存しうる」ために「私」を自然と結びつけ、自分のことと捉えて和やかに共存していけば、「天下が平和に栄え」ことができ、人と自然の永続を実現できます。

---

本川達雄（著）、張宏岩（訳）、『生物多様性』、新星出版社、2020年版。

## 盛唐の書が日本へ渡り、漢方の救済が代々伝わる ——『鑑真伝法東渡記』を読んで

南開大学  
外国語学院 3年  
王奕博

万水千山を踏み、雨雪風霜を經り。寒来暑往を歴、一世の扶桑を護る。

——前書き

「百年に一度もない」コロナ禍により人々の健康不安が空前の高まりを見せ、中国医学に対する新たな議論も起きました。実は、中国の伝統医学は早くから世界に向かっており、韓国では「韓薬」、日本では「漢方」と呼ばれています。では、黄河流域に源を發する漢方薬はどのように海を渡り、日本に伝わって大きく發展したのでしょうか。鑑真和上の物語によって、この疑問に対する筋が通りました。日本の漢方と密接な関係があり、おかげで生物多様性と人類の健康の関係に対する新しい思考と認識を持つこともできました。

### 仏法と薬を伝え日本を救済—鑑真と日本の漢方の出会い

漢方薬はどのようにして日本に根を下ろしたのでしょうか。鑑真がその中で重要な働きをしています。鑑真と言えば、毅然として、仏法を日本に伝えたというのが得てして世の人の第一印象です。確かに、彼は10年もかけ、6回も日本へ渡って、友人らを失い、失明しても諦めず、最後に中日交流史上の美談を成し遂げました。しかし、慈悲深い鑑真は日本へ渡って仏法だけではなく薬も伝え、医術を田野に伝授して、日本の漢方を宮廷の貴族から庶



民の人に向かわせたのです。朝廷で、鑑真はずば抜けた医術相で光明皇太后、聖武天皇を診療しました。田野では日本の当時の民間薬に対して識別をしておいて、日本に紹介した『傷寒論』、『金匱要略』などの専門書籍は、日本の漢方医学の発展を強力に促したため、日本の医薬界で「医事の祖」と尊ばれています。一つまた一つと「鑑真」が中国の医薬の知恵を日本にもたらし、日本の民衆へと普及させたのだと言えます。

### 栄枯盛衰を経て、今その光芒を放つ：日本社会と付き合い溶け合った百草

鑑真はどのように漢方に影響したのでしょうか。まちがいなく、鑑真の日本の漢方の医学の発展に対する影響は長期的なものです。鑑真が日本にもたらした数十種類の処方のうち、「奇効丸」などの処方ほとんど日本民間の常備薬となり、江戸時代まで、薬の包みに鑑真の胸像を刷って本物の証明としていました。鑑真の後、漢方医薬は継続的に発展し、粘り強い生命力を見せています。数百年を経て中国医薬の文化を学習、吸収し、日本国内の医薬文化の意識が目覚め始めました。『医心方』、『万安方』といった日本の特色ある漢方医学書が現れ、多くの医学家、学者が学習経験を具体的な実践と結び合わせるようになり、古方派、後世派、折衷派という三大主流派に発展しました。明治時代の「滅漢興洋」運動で一度は当時「陳腐」とされた漢方医学は深刻な打撃を受けましたが、のちに和田啓十郎、湯本求真らの努力により漢方医学が改めて日本の民衆に認められ重視されるようになりました。

漢方は今どういう状況でしょうか。時代は肯定的な答えを示しています。こんにちの日本の漢方医薬は、伝統の知恵を留めたうえで、標準化と科学化の面では時代とともに進んで、国民の社会生活の中で不可欠な構成部分となっています。新型コロナウイルスのパンデミック以降、中高年で「五苓散」、「葛根湯」などの常用される煎じ薬を家庭に備え付ける人が増えました。テンポの速い現代社会では、たくさんの若い日本人も漢方薬を不安の緩和に試み始めており、薬の材料を購入して「酸梅湯」、「秋梨湯」を自作するのが若者の間で「養生ブーム」となっています。「物それぞれに性質があり、性質はそれぞれ役に立つ」こそ、日本の漢方が千年も衰えない精髓のありかです。

### 小さな薬草、大きなエネルギー：人の健康は生物多様性と共に育つ

次々に生える薬草は、実は生物多様性と人の健康との密接な関係を示しています。「万物はおのおの和を得て生じ、おのおの養を得て成る。」人と自然の調和がとれた共生は、中国伝統医学、日本の漢方がずっと共有している健康の理念です。「生物多様性条約」の締約国が増え、生物多様性と人の健康がますます重視されつつある今、密接に関連する伝統医学の民間薬はおのずと新しい発展があるはずです。百草薬を飲み、黄河の水を飲んで育った自分にとって、いつもにぎわいのある医聖祠、よく先生から話聞く張仲景が中国医学に対する第一印象です。人々の中国医学の文化に対する興味が強まるにつれ、郷里の医聖文化園は全世界に向けた中国医学の聖地と世界の中国医薬の文化的ランドマークを目標に建設が進んでいます。そして「国の大医」に対する人々の期待に応えるため、計画に含まれる張仲景中国医学大学などの高等教育機関が、中国医学を発揚し、国民に利益をも

たらず使命を負っています。生物多様性と人の健康は運命を共にしており、生物多様性を保護することが実は人の健康を保護することだ、と小さな薬草が教えてくれます。

初め弟子を説得して共に日本へ渡るため、鑑真は長屋王子が「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁」と刺繍した袈裟を中国の多くの僧に布施したことに言及していますが、これは中日の間の友好交流を代表するものです。千百年ののち、「山川異域 風月同天」の八字が記された物資の箱が日本から中国に届き、日本の友人の健康への関心と誠実な祈りを伴って、コロナ禍と戦う中国の人々を励ましました。時代は異なるものの、共通しているのは中日交流の実践、さらには生物多様性と人の健康に対する深い関心です。」

千五百年前、鑑真は弟子からの安全への心配、不確定性に満ちた未来への周囲の心配に直面して、「仏事のためだ、どうして命を惜しむものか」と答えました。それから盛唐の書が日本へ渡り、漢方の救済が代々伝わるのです。

『鑑真伝法東渡記』を閉じ、鑑真の波乱に満ちた一生を反芻しました。日本語専攻の大学生として、多くの人から日本語の専門の発展、未来の就業などの面の心配を聞いたことがあります。「日本語はカルデラだ」の類の言葉はインターネット時代の今や至る所に見られ、自分も当惑したことはあります。しかし、鑑真が一生で直面した非難と受けた挫折を思えば、目の前のためらいなどものの数ではありません。世の中に入り乱れている他人の受け売りよりも、中日の友好交流、両国の中の文明の相互参照のほうが、進路として魅力的なのです。

中日の交流、人の健康の現在と未来に向き合い、「これを使命として、決して辞さない」というのがためらいのない回答です。せっせと探求に励み、自分の力を両国の新興に捧げたいと思います。筆をとった黎明の時分には星明かりが点々としていました。もしかすると今の星の輝きも鑑真の肩をこぼれ落ちたものでしょうか。私も自分の星を見つけられました。

---

読んだ資料と書籍：

- [1] 雷勇、鑑真[M]、北京、中華書局、2022年版。
- [2] 余日昌、江蘇曆代名人伝記叢書・鑑真[M]、江蘇、江蘇人民出版社、2015年版。
- [3] 余大慶、鑑真伝法東渡記[M]、浙江、浙江教育出版社、2008年版。
- [4] 真人元開、鑑真和尚東征伝（梁明院校注）[M]、北京、商務印書館 中国旅遊出版社、2016年版。
- [5] 趙永旺、柏瑩、劉崢嶸ら、日本漢方医薬学発展歷程对我国中医薬学発展的啓示[J]、湖南中医薬大学学报、2018, 38(05):601-604.
- [6] 李浩娜、馬承敵、張正光、日本漢方医薬的歴史教訓与中医薬現代化問題思考[J]、中国中医薬信息雑誌、2012, 19(01):6-7.
- [7] 株式会社ツムラ「漢方の歴史」  
<https://www.tsumura.co.jp/kampo/history/index.html>

検索日：2023年9月24日

「桜の鏡」に見る生物多様性保護と日本社会の発展変遷  
——阿部 菜穂子『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』を  
読んで

北京大学  
哲学系 中国哲学 3年  
王敬淇

平安時代後期の僧侶で詩人、西行は、桜を心の中の菩提と見立て、和歌にこう詠んでいます。

願わくは  
花のしたにて 春死なん  
そのきさらぎの 望月の頃

イギリスの園芸家、鳥類学の専門家、桜守、そして同書の主役であるコリングウッド・イングラムは、花盛りの桜を見たときの気持ちを次のように日記に綴っています。

私はそこに長い時間座り込み、美しい景色がゆっくりと自分の魂に染み込んでいくのを、ただ感じていた。

桜は日本の民間で公認されている国花で、この民族の「美」に対する感知と体感が凝集しています。桜は国境を越えて、生まれは清浄、咲けば熱く、舞い散るさまも絢爛な姿は世界各地の春に書き込まれてもいます。世界の人々が生物の美、自然の美を鑑賞する暗黙の了解と共通認識を凝縮しているのです。しかしこの美の精霊も、かつて日本社会の発展や変遷の影響を受け、品種多様性が急激に減って、多数の品種が絶滅の苦しみに瀕したこともあります。

日本のジャーナリストでドキュメンタリー作家の阿部 菜穂子が著した『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』は、英国の桜愛好家コリングウッド・イングラムの一生から始まり、英日両国における伝播史、保護史を記録しています。同書では第4章で日本の桜の歴史について整理されています。桜の保護史は生き生きとした日本社会

の発展史でもあると言えます。

日本列島の人々が農耕民族として定住して以来、桜はこの民族に寄り添って成長してきました。桜の繁殖の構造は独特で、遺伝子の異なる株の間でしか受粉できません。そのため野生の桜は木ごとに少しずつ違いを持つようになり、原生の多様性が作られました。いにしへの日本の農民は山の神が稲を見守るため桜の花弁の間に身を寄せていると考えていました。桜の開花は人々が田植えを始める合図で、桜が次第に原初の村落共同体のシンボルと民間信仰の対象になっていったことは、人と自然の質素でロマンのある交流を体現しています。9世紀に入ると、日本民族の主体性が次第に目覚めるにつれ、日本人は中国文化の受け売りを抜け出したいとますます切に求めるようになりました。桜をその新たに目覚めた民族のシンボルに選び、日本人の桜に対する愛がより強く深くなったのです。桜はますます貴族に愛され、植え付けが絶えず広がり、栽培品種も増え続けるようになりました。桜の植栽は江戸時代に全盛期を迎えています。

19世紀の中葉から末にかけて、この局面に巨大な変化が発生しました。この時期、日本社会には史上かつてない揺れ動きと変革がありました。西洋人が「近代化」の潮流をひっさげて日本に開国させたため、桜は巨大な衝撃を受けたのです。イングラムが日記に無念さを綴ったように、西洋の建物、景観が日本を席卷するにつれ、日本社会は本来の審美の味わいを失って、何種類もの桜を鑑賞する気長でのどかな趣を失い、花の華麗さだけに熱中するようになりました。それと共に、商業主義の波により、多くの品種は需要量が小さく、成長周期が長いため、不経済だとして市場で淘汰されていきました。明治政府も新しい時代の都市の景観を築こうと焦り、成長の早いソメイヨシノを大規模に普及させたため、他の品種は次第に見られなくなっていったのです。

この景観の形成は、日本の軍国主義化する過程とほぼ同時に進んでおり、桜は多種が共存し、開花が連綿と続き、順番に生長するものではなく、同時に開花し、瞬時にすべて落下するという特徴がちょうど軍国主義の精神の核心に呼応しました。この時期、桜を鑑賞する焦点はもうその生命力と開放ではなく、舞い散る方に移っていました。優れた人物は桜が舞い散るように未練なく国のために命を捨てるべきだという、滅びを標榜した「桜の意識形態」が次第に形成されていったのです。

日本社会の変遷につれて急激に悪化する桜の生態には憤慨せざるを得ません。その中で種の保護の行動を貫くというのは、格別に慧眼であり、感動します。イングラムは桜の生態の日本における変遷を目にして、何度も桜の多様性に危険が迫っていると警告しました。『チェリー・イングラム』では、イングラムの生涯という視点から、桜を愛する人々による、桜の多様性を保護するための努力が述べられています。遠い海を越えた一株一株の桜の接ぎ木から、イングラムが稀少な品種を保存するため大陸の別の岸に「桜博物館」を建てるまで。桜の会と多くの日本の学者が権力を独占する波の中で、冷静さを保ち桜の多様性のために公正に主張するところから、荒川堤にソメイヨシノを植栽することに反対し、78種のサトザクラを残すところまで。生物多様性の保護に対する大先輩の鋭さと責任感に

は嘆息させられます。

本文のテーマに「桜の鏡」という比喩を採用したのは、桜の生態の変化と保護の歴史が、生き生きと日本の政治、経済、社会、思想、文化など多方面での変遷を反映している、日本民族の別種の発展史だからです。前文をまとめて感じられるのは、ある国がその土地に生息する動植物に対応する様子から、その国がどのように自らの価値を定義し、自らの伝統を評価して発展の道を選ぶかどのように自らの価値を定義し、自らの伝統を評価して発展の道を選ぶかが見えるということです。では、生物多様性の保護を国家の発展と結び合わせると、また心社会の変遷によるマイナスの影響を警戒し、そのものの規則に従って、自然の独立した地位を尊重するということになります。同時に、生物多様性の保護が国境を越えるという一面も見られます。それは人々の生物の美、自然の美に対する心からの愛です。そうした愛は功利に関係しない審美的活動や精神的享樂であり、動植物の命に向き合ったときの拭えない「忍びなさ」であり、それでこそ桜を愛する人々が手を取り合って桜の多様性を保護する苦勞があったのです。

記憶の中では、小学校から大学まで、私の成長してきたキャンパスすべてに桜の姿があります。春の日に、このとおり清らかで煌びやかに美しい桜を見ると、国境や種族を越えた生命の美、魂の深くで全人類と同じリズムを刻む拍動を感じるがよくあります。世の中に桜の多様な美しさが常にありますように。

---

参考文献：『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』、阿部 菜穂子（著）、張秀梅（訳）北京、社会科学文献出版社、2021. 8.

## 千重子と京都のスミレ

南京工業大学  
法政学院 行政管理 1年  
楊東林

「千重子は廊下からながめたり、幹の根もとから見上げたりして、樹上のすみれの「生命」に打たれる時もあれば、「孤獨」がしみて来る時もある。」川端康成は『古都』のまくらでこのように書いています。

川端康成の『古都』は一面の淡く微かな哀愁と寂寥に覆われており、ゆえに独特な魅力を見せて、読者を深く引きつけるのですが、最も印象深いのは冒頭に描かれた小さなスミレ、京都の千重子の呉服店のスミレです。

スミレは多年生宿根植物の一種です。花の大きさは中程度で、紫が濃いものから淡いも

の、まれに白いものもあり、喉部は色がやや薄く紫色のしま模様があります。花期は4月中下旬から9月。形状が鉄釘に似ており、その頂部に紫の花を数輪つけることから、中国では「紫花地丁」と呼ばれています。『古都』の中で、春の満開の桜から、冬の飛び舞う細雪まで、四季の風物から季節の節気まで、京都のあらゆる景物が川端康成のペンで輝いていますが、スミレをその最初にして作品全体の感情の基調を打ち立てたことには、深い意味があるのでしょうか？所感を述べるのにまた利用してもよいでしょうか？答えはもちろんイエスで、疑いの余地もありません。

スミレは中国原産で、朝鮮、日本などにも分布しています。スミレは日光と湿った環境を好み、一般に田畑、荒地、山の斜面の草むら、林の縁、灌木の茂みの中に生え、庭のやや湿った所でよく小群落を形成します。耐陰性と耐寒性があり、土壌を選ばないので、適応性に優れています。小説の中で、主役の千重子が感動の色を浮かべたのも道理です。より含みがあるのは、スミレの花言葉が「誠実」なことで、ロマンチックな愛のエピソードにも事欠きません。これが『古都』の全編の手がかりであり、通奏低音なのではと思います。川端康成は耽美主義者ゆえに、『古都』の作品中でも美が一貫しています。自然の美、人情の美、京都というまちの美、いずれも描写が微に入り細をうがっており、ほんの小さな生き物であっても、独特な味わいで揉み込んでしまいます。『古都』は心の静けさと美に対する深い悟りを与えてくれますが、私には思わず考えてしまうこともあります。世の中の万物は、かわいさがそれぞれ異なっていて、すべての生物はすべて価値があるのでは。外在する観賞と薬用であれ、あるいは内在する精神、感情の伝達であれ、それぞれがつながっていて、自然の真の意義を放って、人の生活と互いに照り映えているのでは。文学作品、彫刻や絵画の芸術、風景や園芸……かくかくしかじか、生き物を大切にして愛護するのは、同じ一因だからで、人と共に銀河の下、紺碧の惑星の中で暮らしているからなのではないでしょうか？

「生命とは自らが目的や価値をもち、それを実現すべくエネルギーを使って働いているものです。進化により目的や価値を自らもつものが生まれました。目的や価値があれば、なぜ大切かという問いにも答えられるようになります。『生物多様性はなぜ大切か』という問いも、この観点から答えられるだろうというのが、本書の姿勢です。」本川達雄は『生物多様性』でこのように述べています。彼は生物学と倫理学の二つの角度から、多様性を保護する理由と価値を探求し、そしてサンゴ礁と熱帯雨林の自然環境を例に、多様性が生じる原因、被る恐れのある破壊、そして人と築かれるつながりについて分析しています。よく考えると、『古都』と異曲同工なところがありますよね。一部から全体のことを見ると、生物多様性と生態系の自然の輪は、惑星の贈り物で、人の幸せです。大昔を振り返ると、祖先も自然の力を便りにしていましたよね？経済が拡大し、科学技術が発展した今の時代、まさか自分たちとともに歩んできた、苦楽を共にしてきた親しき自然を忘れてしまえるものではないでしょうか？

「生物多様性は、〈私〉が永続するという、生物として最も基本となることを実現す

るために 必要なものであり、かつ、〈私〉が豊かな生を生きるためにも真つ当な人間になるためにも必要なものなのです。だから生物多様性を守るべきなのだ——これが本書の結論です。」地球上では190万種類の名前を異にする生物が生息し繁殖しています。もしすべて同種の生物だったら、数がいくら多くても多彩だとは言えません。多様な生物と共に生存しているからこそ、世界は賑やかで多彩なのです。

「白い蝶たちが舞ひ去ったあとまで、千重子は廊下に坐って、もみぢの幹の上のすみれを見てみた」……

---

読んだ図書：『古都』 作者：川端康成

『生物多様性』 作者：本川達雄

参考文献：百度百科（スマレ）

# 「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」

(中国語版)

一等賞作品

(中国語原文)

## 自然与人类：稻作文化下的生物多样性保护之道

復旦大学

マルクス主義学院 修士3年

邓爱

稻，是生命的延续，是粮食的源泉，更是人类与自然相融的见证者。

在时光的长河中，有一种文化，如同涓涓细流，流淌在日本大地上，它承载着人类与自然共生的智慧，这便是稻作文化。稻作文化是日本农业传统的重要组成部分，也是日本文化和生活方式的象征之一。在这个以稻作为核心的文化体系中，自然与人类的关系得到了深刻的体现，同时也展示了一种可持续发展的生物多样性保护之道。

人类学家大贯惠美子有一本书，叫做《作为自我的稻米：日本人穿越时间的身份认同》，作者在书中深入探讨了稻作在日本文化中的独特地位。通过对历史文献、民俗学资料的研究，他呈现了稻作文化在日本的演变过程，从古代的神话传说到现代的农业实践，从皇室到民间，从祭祀到其他习俗，稻米都扮演了至关重要的角色。翻开这本书，仿佛穿越时光的长廊，走进了古老的日本。在这之中，时光如细密的线索，贯穿起古往今来人们对稻作的探索和传承。稻作背后的历史时光是一部不朽的诗篇，记录了日本人民与土地相伴相生的奋斗史。每一个时代都留下了勤劳耕作的足迹，也铸就了稻作文化传承的坚韧意志。

稻作文化在日本的历史可以追溯至古代的深远岁月。水稻及栽培技术由中国东传而来后，在日本群岛播种开来，日本人的生活方式从采集和狩猎向农耕时代转变，从山林向低洼处、河流处迁徙，形成了独特而丰富的稻作文明。

稻作在日本文化中占据着崇高地位，被奉为家族传承的珍宝。因喜爱稻米，日本人养成了以米为原料的“饭粥糕粽”的饮食方式。稻米中富含复合碳水化合物、蛋白质、脂肪等营养成分，是人类所需能量的重要来源。此外，稻米中还富含维生素、矿物质等，对于保持人类的健康至关重要。以稻米为主食的饮食模式也被认为是日本人长寿和健康的秘诀之一。稻作文化的传承不仅仅是一种生活方式，更是一种生态伦理的延续。稻米作为日本人的主食，



承载着他们的生活情感和文化认同。从种植到丰收，从厨房到餐桌，这其中串联着一条生态链条，将人、土地、食物紧密相连。丰收的稻谷不仅满足了人们的温饱需求，更成为了许多重要的节日和仪式的深深烙印。初夏蒔秧苗，夏季稻田蛙鸣，秋季稻米成熟，冬季捣年糕，祭祀诸神，与稻作紧密相连。在丰年祭、稻荷祭等庆典中，人们向大地表达感激之情，也表达了对自然恩赐的敬仰之意。稻米不仅仅是一种食物，更是一种精神寄托，承载着人们对丰收、幸福和生活安定的向往。

稻作文化的传承中蕴含着丰富的智慧。在传统的稻作文化中，农民们通过繁复的农事活动与自然相互交融，形成了一套适应自然规律的农业技术与管理方法。他们仔细观察气象、倾听土地的声音，依据自然的规律进行农事活动，如选时种植、掌握灌溉、调节水位等。他们懂得如何合理利用水资源，保持湿地的生态平衡。他们也懂得如何进行轮作休耕，保持土地的肥沃度，避免土地的过度耗损。使得农田成为了一个自给自足的生态系统。这种人与自然的互动方式反映了一种深刻的生态共生观念，使得人类不再是生态系统的破坏者，而是其一部分，共同参与到自然的生态平衡中。

稻作文化不仅影响了农田生态系统，也对整个农业生态系统的保护起到了积极的推动作用。在传统的稻作文化中，人们常常会将稻田与其他农作物相结合，形成了多样化的农业生态系统，包括了水稻、鱼类、昆虫等多种生物。稻田提供了一个良好的生活环境。在稻田中，水通过植物的根系，不仅能够被有效吸收和利用，同时也能够净化水质，提升水体的生态健康。稻根深入土壤，为土壤微生物提供了栖息之地，稻草成了昆虫们的家园，而在水中，各类鱼类繁衍生息，形成了一个生态链的奇妙乐章。这片湿地生态系统的存在，保护了许多珍稀物种的栖息地，让生物多样性在这片土地上得到了传承与繁衍。稻田既是农人们劳作的地方，也是虫鱼鸟兽们栖息繁衍的天堂。稻作文化如同一片生态的花环，将各种生灵紧密地编织在一起，和谐共存。

在日本的土地上，稻作文化犹如一幅古老而神秘的画卷，绵延千年，扎根于人们的心灵深处。稻作被视为生命的恩赐，象征着丰饶与祥和，是大地母亲的慷慨馈赠。田间的稻香扑鼻，宛如一曲自然的歌谣，唱响着人与土地共生共荣的史诗。种稻、收割、享用丰硕的成果，不仅仅是一种农事，更是一种生活的仪式，一种对自然的感恩。稻作成为日本人精神寄托的象征，连接着过去、现在和未来的时空纽带。

在日本的稻作文化中，我们感受到了人类与自然共生的智慧，也看到了人类在与自然相处中所体悟到的哲学思考。稻作文化不仅是农业的发展，更是一种生命的诗篇，一部人类与自然共同创作的史诗，为我们提供了一种可持续发展的生物多样性保护之道。在这片土地上，稻作文化如一首动人的乐章，唤起了人类与自然和谐共舞的美好愿景，我们在这个旋律中翩翩起舞，传承着生态共生的精神，继续谱写着生物多样性的新篇章，与自然合歌而鸣。

---

阅读书目：大贯惠美子：《作为自我的稻米：日本人穿越时间的身份认同》，石峰译，商务印书馆2015年版。

## 各美其美，美美与共 ——读本川达雄《生物多样性》

宁波大学

人文メディア学院 中国語文学 修士1年

潘俊杰

《美的情愫》是一部由日本著名画家东山魁夷写的散文集，作者在书中倾诉了对前半生游历的回忆，极大地阐释他的自然观，思索人生哲理。读这本书如同观赏一个棋盘，能被它牵引着发现当中的巧妙，也可能在陷入迷阵中不断解惑。在本书中清晰可见东山魁夷对日式美的感悟乃至对如何与自然和谐相处的感悟。

从书中第一章《探索日本的美》便发现东山的美学认知中饱含对日本本土的热爱，这是他传递理念的根源。从少年时代居住在环境优美的港口城市—神户，到进入东京美术学校求学，扎根在日本的他本能地对这个国度的自然美感知更多，领悟更甚。日本的自然风景是他在淡路岛度过夏天时接近海，看见拂晓时天空在地平线近处染成暗红色，又或是日暮时分在圆山公园看见一株垂樱满枝披上淡红色的妆扮。这些熟悉又陌生的自然美培育他初始的审美，成就他的艺术品性。

自然风景画是东山创作的重要体裁，他敏锐地观察自然的色彩，抱着与自然共生的态度去写生、写文。此外也不可忽视日本文化对东山建构起的价值指向。透过东山的笔，我能感受到日本是一个顺应自然规律的国家，即使在工业化城市化快速发展的情况下，这个国度仍最大限度地保留自然本属的风光，这是文明的。而东山热衷挖掘日本古典文化，品鉴《万叶集》等传统著作，在他印象中大和之美无与伦比，由此东山内心对待大和之美也尤其真挚而珍视。

除此之外，东山在西方进修与在中国游览的经历亦是重要的创作源泉。不同的风景打开眼界，无论是在巡游欧洲各国、接受西方新思潮，却仍坚守朴实而坚定的态度去创作自己的东西，还是在三游中国后领悟东方之美，勾忆起中日文化交流的往昔，在对待外来文化时，东山始终保持一种可贵的尊重理解但绝不人云亦云的态度，这既促进作者不断汲取东西方文化的精华，也为其心境变化、艺术创作都提供不少新认知和新思路。以书中提及他拜访幽静的圣马科斯修道院和看见安吉利科这些充满谦恭而质朴的壁画，领悟出应该珍视自己的世界，挖掘作为画家的价值；乃至在参观南京、扬州多地时感受到中国水墨画由产生到登峰造极的不易旅程，对水墨画的精神性给予深切关心此二况都能察觉文化交流对东山带来的影响。

文化资源乃至自然绿色资源都是有限的，东山在书中的选择是将自然资源的珍贵通过文字与画像传达出来，创造文化资源，催动人们发现日式美、发现自然美，在无形中增强人民保护意识，续而达到另一种意义上的“高效利用绿色能源”。

东山笔下的散文反映的淡雅是他总能通过朴实素净的语言或绘画去描述现象、解释观点，抛开中日翻译的壁垒，他能于丝丝扣扣中用文字的力量柔入心房。如在讲述鉴真和尚心中的风

景时，于结尾处写“多么希望鉴真能看到日本的风景啊，哪怕是一眼。”和在阐发“献给鉴真和尚的灵魂”时，他作隔扇画《山云》、《涛声》，无论是色调上大多是淡灰、青紫，还是决意以典型的山与海表达对鉴真和尚的敬意，这都是在东山笔下对淡雅的倾泻，是刻意构思，也是耐心领会后的成果。当全身心投入到自然中，一切景语皆情语，他对自然美的爱浮跃纸上。

此外他在于自然的和谐相处中达到纯正的浑融一体的状态，何以见得？主要体现在东山与大和之美紧密的联系上，是于奈良公园窥见充满盎然生机的山野，心悦人文与美景相映的协调；也是察觉到三轮山里有日本的美的原形，观察到大自然的变化，“春天萌芽，夏天繁茂，秋天妖娆，冬天清静”<sup>2</sup>。由自然到本我，在贴近中察觉到自然的轨迹与人息息相关，充满真实，同时自身内部是存在矛盾的，需要在幽静中无尽的思索，发现本我，达到协调的状态，从而上升到无我之境。所以究其根源，东山能够对“美的情愫”产生淡雅幽玄的理解重点在于他自身对自然美有充分的尊重与认知，他爱自然，也沉浸在这份爱中。

回归到现实生活中，低碳与绿色能源是可持续发展必不可少的关键词，《美的情愫》告知我需要先热爱这份自然美，才能真正做到遵循低碳与利用绿色能源这些规矩，不抵达思想上的共鸣，是很难能真正落到实践的，我们都应该去拥抱守护这份不止在日本，在中国，更是在全世界都共通的美，与自然合一。

---

1 [日]本川达雄著、张宏岩译：《生物多样性》，新星出版社，2020年版。

## 毕生东渡书盛唐，汉方济世传扶桑 一读《鉴真传法东渡记》有感

南开大学  
外国语学院 3年  
王奕博

踏万水千山，经雨雪风霜；历寒来暑往，护一世扶桑。一题记

“百年未遇”的新冠肺炎疫情，引发了人们前所未有的健康担忧，也激发了人们对中医的新一轮讨论。其实，中国传统医学早已走向世界，在韩国叫“韩药”，在日本叫“汉方”。那么，发源于黄河流域的中草药，是怎样漂洋过海，传到日本并发展壮大起来的呢？鉴真和尚的故事让我对这一疑问有了眉目，而其与日本汉方的密切联系，也使我对生物多样性与人类健康的关系有了新的思考与认识。

### 传法传药、济世扶桑：鉴真，同日本汉方相遇相知

中草药何以扎根日本？鉴真于中有着重要作用。提起鉴真，顶天立地、传法东瀛，这

往往是世人的第一印象。诚然，十载春秋，六次东渡，伤友病逝，遗憾失明却不言放弃，最终成就了中日交往史上的一段佳话。然而，慈悲的鉴真不仅东渡传法，同时东渡传药，把治病救人的医术传授给田野，让日本汉方从宫廷贵族走向百姓人家。于朝廷，鉴真以高超的医术先后为光明太后、圣武天皇诊治；于田野，鉴真对日本当时的草药进行了重新辨别，介绍到日本的《伤寒论》《金匱要略》等专业书籍更是极大地促进了日本汉方医学的发展，被日本医药界奉为“医事之祖”。可以说，正是一个又一个“鉴真”，将中国的医药智慧带到扶桑，并向日本民众推广。

### **沉浮数代、今放光芒：百草，共日本社会相伴相融**

鉴真如何影响汉方？无疑，鉴真对日本汉方医学发展的影响是长久的。在鉴真带去日本的数十种药方中，“奇效丸”等药方几乎成为日本民间常备药，一直到日本江户时代，都会在药包印上鉴真头像，以辨真伪。鉴真之后，汉方医药不断发展，展现出顽强的生命：经过数百年对中医药文化的学习和吸收，日本国内的医药文化意识开始觉醒，出现了诸如《医心方》《万安方》等具有日本特色的汉方医学书目，也有越来越多的医家、学者将学习经验与具体实践相结合，发展出古方派、后世派、折衷派三大主要流派。虽然明治时期的“灭汉兴洋”运动一度对当时被认为“陈腐”的汉方医学造成沉重打击，但之后在和田启十郎、汤本求真等人的努力下汉方医学再次受到日本民众的重视和认可。

汉方于今情况怎样？时代给出了肯定的回答。今天的日本汉方医药，既保留着传统的智慧，也在标准化和科学化上与时俱进，成为国民社会生活中不可缺少的组成部分。新冠疫情爆发后，中老年人纷纷将“五苓散”、“葛根汤”等常用汤剂纳入家庭药箱用以调理身体。而在当今快节奏的现代社会下，许多年轻的日本人也开始尝试用汉方药缓解焦虑，购买药材自制“酸梅汤”、“秋梨汤”等行为更是在年轻人中掀起一股“养生潮流”。“物各有性，性各有用”，这便是日本汉方连续千年、久盛不衰的精髓所在。

### **小小药草，大大能量：人类健康，与生物多样性相生相长**

生生不息的药草，实则喻示了生物多样性与人类健康的密切关系。“万物各得其和以生，各得其养以成。”人与自然和谐共生，自始至终便是中国中医、日本汉方共有的健康理念。在越来越多国家签署实施《生物多样性公约》、生物多样性与人类健康日益受到重视的当下，与其密切相关的传统医草药自然应有新的发展。吃着百草药，喝着黄河水长大的我，总是熙熙攘攘的医圣祠、常听师长提及的张仲景是我对中医的第一印象。随着人们对中医文化的兴趣渐浓，家乡的医圣文化园正朝全球中医圣地和世界中医药文化地标的目标积极建设；而为了回应人们对国之大医的期待，规划当中的张仲景国医大学等一所所高等学府承担起发扬中医、寿国寿民的使命。小小的药草告诉人们，生物多样性和人类健康命运与共，保护生物多样性其实就是保护人类健康。

当初为说服弟子一同东渡，鉴真提及长屋王子曾将绣有“山川异域，风月同天，寄诸佛子，共结来缘”的袈裟布施与中国众僧，代表中日之间的友好交流。而在千百年后，带有“山川异域，风月同天”八字的物资箱由日本来到中国，伴随日本友人对健康的关心和真诚的祝愿，激励着中国人民在抗疫斗争中顽强拼搏。时代虽有不同，但相通的是对中日

交流的实践，以及对生物多样性与人类健康的深切关注。

一千五百年前，鉴真面对弟子对安全的担心、众人对充满不确定性未来的忧虑，回答道：“是为法事也，何惜身命。”从此毕生东渡书盛唐，汉方济世传世扶桑。

合上《鉴真传法东渡记》，我反复品味着鉴真波澜状况的一生。作为高校日语专业的学子，听过很多人表达对日语专业发展、未来就业等方面的担忧，“日语是天坑”之类的话语在互联网时代的今日处处可见，我也曾为此一度感到彷徨。但是，想到鉴真一生面临的非议与遭受的挫折，我目前的踌躇又算什么！相比世上纷纷杂杂的人云亦云，中日友好交流、两国之间的文明互鉴更吸引我坚定前行。

面对中日交流、人类健康的现在与未来，“是为使命，在所不辞”是我毫不犹豫的回答，孜孜以求勤探索，愿献己力兴两邦。落笔，黎明时际星光点点。或许此刻星辉也曾于鉴真肩膀洒落，而我也找到了属于我的一颗。

---

阅读资料与书目：

- [1] 雷勇. 鉴真[M]. 北京：中华书局，2022年版。
- [2] 余日昌. 江苏历代名人传记丛书·鉴真[M]. 江苏：江苏人民出版社，2015年版。
- [3] 余大庆. 鉴真传法东渡记[M]. 浙江：浙江教育出版社，2008年版。
- [4] （日）真人元开. 鉴真和尚东征传（梁明院校注）[M]. 北京：商务印书馆 中国旅游出版社，2016年版。
- [5] 赵永旺, 柏莹, 刘峥嵘等. 日本汉方医药学发展历程对我国中医药学发展的启示[J]. 湖南中医药大学学报, 2018, 38(05):601-604.
- [6] 李浩娜, 马承严, 张正光. 日本汉方医药的历史教训与中医药现代化问题思考[J]. 中国中医药信息杂志, 2012, 19(01):6-7.
- [7] 津村制药（ツムラ）. “漢方の歴史”  
<https://www.tsumura.co.jp/kampo/history/index.html>  
检索时间：2023年9月24日

## “樱之镜”中看生物多样性保护与日本社会发展变迁 ——读阿部菜穗子《樱格拉姆：拯救日本樱花的英国人》

北京大学  
哲学系 中国哲学 3年  
王敬淇

平安时代后期的日本僧侣诗人西行曾将樱花看作心中菩提，在和歌中咏道：

**吾心中所愿**  
**春日樱花树下死**  
二月十五月圆日<sup>1</sup>

英国园艺家、鸟类学专家、樱花守护人，也是《樱格拉姆》一书的主角科林伍德·英格拉姆曾在日记中这样描述自己看到樱花盛开时的心情：

**我长时间地坐在那里，只是静静地感受着这美景缓缓渗透我的灵魂。<sup>2</sup>**

樱花是日本民间公认的国花，凝聚了这个民族对“美”的感知与体认。樱花也穿越国界，将其生而纯净、发而热烈、凋落亦缤纷绚烂的美好姿态写进世界各地的春天，凝结起世界人民欣赏生物之美、自然之美的默契与共识。但这位美的精灵，也曾受到日本社会发展变迁的响，经历了品种多样性急剧减少、多个品种濒于绝种的磨难。

日本新闻工作者、纪实文学家阿部菜穗子的《樱格拉姆：拯救日本樱花的英国人》一书从一位英国爱樱人士科林伍德·英格拉姆的一生出发，记录了樱花在英日两国的传播史、保护史。书中第四章特别就日本樱花的历史做了梳理。可以说，樱花的保护史也是一部生动的日本社会发展史。

从日本作为农耕民族在日本列岛定居开始，樱花就陪伴着这个民族生长起来。樱花的繁殖机制独特，只有基因不同的异株樱树才能完成授粉，这就使得野生樱花的每棵树都略带差异，成就了其原生的多样性。古时的日本农民认为山神为守护稻米而栖身于樱花花瓣之间，樱花开放便提醒着人们开始插秧，樱花逐渐成为最早的村庄共同体的象征和民间信仰的对象，体现着人与自然朴素而浪漫的交流互动。时至九世纪，随着日本民族的主体性逐渐觉醒，日本人越发渴求摆脱对中国文化的全盘接受，樱花被选作这个新觉民族的象征，日本人对樱花的爱更为热切和深邃。樱花也越发受到贵族青睐，不断被种植和迁移，栽培品种不断增加，江户时代樱花种植进入全盛时期。

19世纪中叶到末期，这一局面发生了巨大变化。这一时期，日本社会经历了史无前例的动荡和变革，西方人带着“近代化”的潮流打开了日本国门，樱花受到了巨大冲击。正如英格拉姆在日记中遗憾写到的，随着西洋建筑、景观席卷日本，日本社会失去了原本的审美意趣，失去了欣赏不同品类樱花的耐心和闲趣，只热衷于花朵是否华丽；与之相伴，商业主义浪潮下很多品种的樱花因为需求量小、生长周期长，经济效益不佳而逐渐被市场淘汰；明治政府又急于建设新时代城市景观，批量推广种植一种叫作“染井吉野”的速生樱花，其他品种的樱花逐渐被排挤出人们的视线。

而这一景观的形成，又与日本军国主义化进程基本同步，樱花不再多种共存、连绵开放、次第生长而是同时开放、瞬时全部凋落的特点恰好呼应了军国主义的精神内核。这一时期，欣赏樱花的焦点不再集中于它的生机与绽放，而是转向了它的凋零与死亡——真正优秀的人当

像樱花倏而凋落那样成为毫不留恋为国赴死，逐渐形成标榜毁灭的“樱花意识形态”。

随着日本社会变迁而急剧恶化的樱花生态让人不禁扼腕，贯穿其中的物种保护行动便显得格外亮眼和感人。英格拉姆见证了樱花生态在日本的变迁，多次警告日本樱花多样性告急。

《樱格拉姆》一书正是从英格拉姆的生平视角，讲述了很多日内外爱樱人士保护对樱花多样性做出的努力，从穿越重洋的一株株樱花接穗，到英格拉姆在大陆另一岸建造“樱花植物园”为珍稀品种留存遗株；从樱之会和众多日本学者在极权浪潮中保持清醒并为樱花多样性仗义执言，到荒川堤上拒种“染井吉野”而是留住 78 种里樱的逆行坚守，都让人感喟于前辈们对生物多样性保护的敏锐和担当。

本文题目采取“樱之镜”这一比喻，正是因为樱花生态变化和保护的生动反映了日本政治、经济、社会、思想、文化等多方面的变迁，是一部别样的日本民族发展史。综合前文我们能够感受到，从一个国家怎样对待栖息其间的动植物，就可以看出这个国家怎样定义自身价值、怎样看待自身传统以及怎样选择发展道路。那么，生物多样性的保护既要与国家发展相结合，又要警惕社会变迁带来的负面影响，遵循其自身规律，尊重自然的独立地位。同时，我也看到了生物多样性保护超越国界的一面，那是出于人们对生物之美、自然之美发自内心的爱。这种爱是无关功利的审美活动和精神享受，是面对动植物生灵时无法释怀的“不忍之心”，这才有了爱樱人士携手保护樱花多样性的艰苦卓绝。

在我的记忆中，从小学到中学再到大学，每个伴我成长的校园里都有樱花的身影。每每春日，当我面对纯净如斯、绚丽如斯的樱花时，也会感到那种超越国家和种族的生命之美，感受到那灵魂深处与所有人类同频的悸动。愿樱花多样之美常伴人间。

---

参考文献：《英格拉姆：拯救日本樱花的英国人》，（日）阿布莱穗子著；张秀梅译。—北京：社会科学文献出版社，2021.8.

<sup>1</sup> 《英格拉姆：拯救日本樱花的英国人》，（日）阿布莱穗子著；张秀梅译。—北京：社会科学文献出版社，2021.8. 第 129-130 页。

<sup>2</sup> 《英格拉姆：拯救日本樱花的英国人》，（日）阿布莱穗子著；张秀梅译。—北京：社会科学文献出版社，2021.8. 第 65 页。

## 千重子与京都的紫花地丁

南京工业大学

法政学院 行政管理 1年

楊東林

“千重子会从走廊远望，或是站在树下仰望，有时被树上紫花地丁的生命力感动，有时则是感受到孤独渗入心底。”川端康成在其作《古都》的开篇如此写道。

川端康成的《古都》笼罩在一片淡淡的哀愁与寂寥之中，也正因如此，其作显现出独具特色的魅力，深深吸引着每一位读者，而最让我映像深刻的，则是开头所描绘的那一小片紫花地丁，在京都的千重子的古布纺店的那紫花地丁。

紫花地丁，是一种多年生宿根植物。花中等大，紫堇色或淡紫色，稀呈白色，喉部色较淡并带有紫色条纹；花果期4月中下旬至9月。因为其形状像一根铁钉，顶头开几朵紫花，就取了“紫花地丁”的名字。在《古都》中，从春天的樱花盛开，到冬天的细雪飞舞，从四季风物到时令节气，凡是京都的一景一物，都在川端康成的笔下熠熠生辉，而这紫花地丁，川端康成以其作文之开头，奠定起全篇全作的感情基调，是否有其深意？我们能否又借此感慨抒怀一番呢？答案当然是肯定的，当然是毋庸置疑的。

紫花地丁原产于中国，在朝鲜、日本等地也有分布。紫花地丁性喜阳光，喜湿润的环境，一般生于田间、荒地、山坡草丛、林缘或灌木丛中，在庭园较湿润处常形成小群落。紫花地丁耐荫也耐寒，不择土壤，适应性极强。这也难怪在小说中，主角千重子会为之所动容。更为有蕴意的是，紫花地丁的花语是诚实，其也不乏浪漫爱情的传说逸闻。我想，这似乎也正是《古都》的全篇线索与悠悠之情。川端康成作为唯美主义者，在《古都》创作中，把美贯穿到底，无论是自然美还是人情美，将京都这座都市的美，描绘得淋漓尽致，即便是如此微小的生物，川端康成也以独特的品味将其捻揉相融。《古都》带给人内心的静谧与对美的深刻悟谛，同时也让我、让我们不禁去思考：世间万物，可爱之态各不相同，而每一个生物都有其价值，无论是外在的观赏与药用，亦或是内在的精神、情感的传递，它们环环相扣，散发自然的真谛，与人类的生活交相辉映，文学作品、艺术雕画、风景园艺……如此这般，我们为何不珍惜它们、爱护它们，它们是我们的一员，与人类共同栖息居住于银河下白花湛蓝的一颗星球之中，对吗？“而所谓生命，则是为了实现存活于世上的目的与价值，消耗能量不停工作的历程。通过演化，每个个体都有自己的目的与价值，自然也就有了‘为什么生命很重要’这一问题的答案。”本川达雄的《生物多样性》如此阐述着，他从生物学和伦理学两个角度，探讨保护多样性的理由与价值，并以珊瑚礁和热带雨林这两种常见的自然环境为例，分析多样性产生的原因、可能遭受的破坏，以及与人类建立的联系。静坐细想，其与《古都》也正有异曲同工之处啊。以小见大，生物多样性与生态系统的自然之环，是星球的馈赠，是人类的寿福，回望远古，我们的祖先不也寄借着自然的力量吗？在经济提升、科技



发展的当今时代，我们难道能忘却那本与我们一路走来、与我们相濡以沫的亲亲自然吗？

“生物最基本的特征便是延续，生物多样性是实现这个目标的必要条件。如果要获得丰富的生活，成为真正的、可称之为人的‘我’，生物多样性不可或缺。所以我们要保护生物多样性。”地球上生息繁衍着一百九十万种不同名字的生物。如果都是同种生物，无论数量再怎么多，也称不上丰富多彩。正因为我们与多样的生物共同生存，世界才这样热闹又丰富多彩。

“千重子一直坐在走廊上望着枫树树干上的紫花地丁，直到白蝶们翩然离去”……

---

所阅图书：《古都》作者：川端康成

《生物多样性》作者：本川达雄

参考文献：百度百科（紫花地丁）

# 「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2023」

(中国語版)

二等賞作品

(中国語原文)

## Hic Sunt Dracones—德拉科尼亚的博物志

蘇州大学

文学院 修士3年

杨帆

作为生物多样性在人类文化中的最直接体现，博物志折射着我们如何认识这个万千物种构成的世界。今日的社会整体已经认识到了保护物种的必要性，但对于个人而言这些必要性似乎都太过遥远，人依旧孤独地活在都市丛林之中。这里我想介绍一个奇怪的作家和他的博物随笔所带来的启示。

高原英理在《少女遇见涩泽龙彦》中写到：“你将成为笔名叫涩泽龙彦的作家，生活在有趣的东西、喜欢的画和玩偶的包围中。而且，在写了很多随笔之后，你会写一部不可思议的小说[ ]。”这位沉溺于奇异事物的作家，后来将自己那包罗万象的书斋称为“德拉科尼亚”（ドラコニア）——“龙之领土”。在欧洲古地图中，“Hic sunt dracones”（意即“这里有龙”）这句拉丁文常被用于标识人迹罕至的神秘荒野，种种幻想的野兽都盘踞于此。

正如书斋名所暗示的那样，涩泽龙彦的笔下出没着无数来自昨日世界的怪兽。他尤其迷恋普林尼的《博物志》，不仅写了随笔集《奇想博物志：我的普林尼》和《幻想博物志》，还将普林尼的怪兽们带进了他的绝笔之作《高丘亲王航海记》中。他自称“去弄清他（普林尼）是否在胡说八道也是我的趣味所在”[ ]，时常对《博物志》展开一番考据，使被遗忘已久的遥远古代记忆世界与现实重新连结到了一起。

这种以现代知识重新考证古代怪异传说的做法并不罕见，此前就有幸田露伴的《东方朔与猛犸象》将《神异经》中所记载的“鼯鼠”解释为西伯利亚冻土层中猛犸象尸体的先例，近年来也有阿德里安娜·梅厄的《最初的化石猎人》这样系统性考据的著作出现。但这类作品往往有彻底“祛魅”的倾向，将神话怪兽直接还原为了平凡无奇的现实生物，扼杀了想象力的价值的同时也失去了人与世界的一种连结方式。但涩泽龙彦的博物随笔呈现的却是完全不同的样貌，正如在《幻鸟谭》中提到的那样，他试图让来自中世的没有实体的黄昏之鸟于现代重新起飞。

具体来说，涩泽龙彦的考证既带有现代知识体系的严谨又保持了对原初语境的好奇与尊重，《磁石》《鸟与风卵》等一系列随笔在简明说理之余还大量援引古典时代人们对这些事物原理解释并附上了与古人共鸣的亲身经历。虽然涩泽龙彦自己并未点明，他实质上已经触及了“观念史”的范畴，这一倾向在随笔集《思考的纹章学》中体现得尤为明显。所谓“纹章学”即完全停滞、不再对现世直接产生作用的无益也无害的纯粹知识，而古典时代的博物学知识在今天已然“过期”，仅能作为思维游戏的对象，同样无法干预现实。由此却能够延伸出一个位于现实与幻想、过去与现在夹缝中的文学世界，在那里大山猫依旧拥有看穿一切的锐利目光，金毛狗蕨和棉花可以继续结出植物羊羔，风鸟仍旧终生不必落地休憩。

古典博物学在涩泽龙彦笔下最终结出了名为《高丘亲王航海记》的硕果，也就是高原英理的少女口中那部“不可思议的小说”。在这个故事里“天竺”是一处天地颠倒、逝水逆流的神奇世界，渴望回到童年的高丘亲王为此踏上旅途，一路遇到儒艮、迦陵频伽鸟、对跖点的大食蚁兽、狗头人、獾、蜜人等曾见于东西方典籍的奇异事物，最终不惜舍身饲虎也要抵达那里。当故事里的亲王因吞下珍珠而气息奄奄时，涩泽龙彦也因咽喉癌而住进了医院。亲王的航行可以看作是作者本人向着那个已然消逝的古典博物学世界的航行，这或许意味着好奇又迷恋昨日世界的龙彦亲王最终也在生死之间寻到了心灵的安憩。

回到“博物志”这一形式本身，它实际体现着我们人类如何认识这个充满万千生灵的世界。古典博物学的消亡并不仅仅意味着物种知识的发展，也意味着我们与世界相处方式的更迭。当代语境下的博物学虽然也打破了工业化以来“征服与改造自然”的人类中心主义的壁垒强调着“世界为万物共有”，但与古典时代相比却又缺少了一份身处万物之间的切身体验感。城市化与科学解释将人与自然的精神联系暂时地遮蔽了起来，使我们感到被孤零零地留在了宇宙之间。而涩泽龙彦则让我们领略古典时代人们如何认识世界，在考证怪物真身的同时也允许它们继续身着神话的外衣起舞，重新建构出人类深度参与的自然。此时我们会发现“德拉科尼亚”所指代的不是实际意义上的“人迹罕至”的荒原，而是一片被我们遗忘已久的生机勃勃的世界。在这里，人重新与世界连结，在和种种奇妙生灵的交流中获得心灵的慰藉。

涩泽龙彦和他的博物随笔所引出的是物种多样性对平凡的每个人的意义——一种与世界共鸣的奇妙可能性。人可以通过了解各个物种在人类文化史上曾扮演过的角色而与过去发生联系，体会人与万物共存的真实境况，不再感到孤独。

---

<sup>1</sup> 劉佳寧. 少女の遠近法：澁澤龍彦「鳥と少女」論[J]. 九州大学日本語文学会, 2020(36), 54-70.

<sup>2</sup> 涩泽龙彦. 奇想博物志 我的普林尼[M]. 黄怡轶译. 长沙：湖南文艺出版社, 2019.

<sup>3</sup> 涩泽龙彦. 思考的纹章学[M]. 刘佳宁译. 桂林：广西师范大学出版社, 2022.

## 毁灭、共存与拯救 ——从川端康成《禽兽》看日本生物多样性观

蘇州大学  
医学院 2年  
杨钰晗

2023年作为中国签署联合国《生物多样性公约》的30周年，以及日本举行名古屋《生物多样性公约》第10次缔约方大会的13周年，生物多样性与人类健康的关系得到了愈来愈多的重视。诺贝尔文学奖得主川端康成的争议之作《禽兽》，学者进行评论时，往往聚焦于文中的道德界限和美学价值，却忽视了文中蕴含的大和民族对生物多样性，以及整个自然社会的价值观。此文如同一面镜子，隐喻出日本在生物多样性方面所经历的“毁灭、共存与拯救”。

“鸟店老板只要弄到什么新品种，就会悄悄地给他送来。有时他的书斋里，养的鸟雀竟多达三十种[ ]。”《禽兽》的主人翁是一位年近四十的男子，极其喜爱鸟类，尤其是偷猎来的野生鸟类。然而却缺乏耐心与经验，时常使饲养的鸟类死亡。这是一种对生命的毁灭。在日本历史上，对生物多样性的极端毁灭并不少见。江户时代的人口剧增导致的自然栖息地的毁坏，第二次世界大战带来的核污染，战后飞速工业化引起的环境破坏，以及近来引起极大关注的核污水排放事件，都对生物多样性造成了毁灭性的打击。其中有历史与战争的原因，也有本身所带来的，从某种意义上来说无法抗拒的自我毁灭。生物多样性的毁灭性破坏，就如同创世神伊邪那美和火神迦具土的死亡，金阁寺的烧毁，是深耕于日本意识中的“破”的审美思想[ ]。

“毁灭”之后所创造出的“共存”，其实也极为矛盾。“菊戴鸢的死，无论是因为溺水或是伤爪，恐怕都是他的过失造成的。他对它们的依依之情反而难以切断[1]。”主人公在帮助最为喜爱的菊戴鸢洗澡之后，在炉火上烘烤菊戴鸢的爪子而导致其死亡。然而菊戴鸢死后，他“落下哀怜的热泪”[1]。这恰恰体现了日本精神里复杂性。日本人视鲸为神，却依旧大力发展捕鲸业，对海洋生物多样性造成了极大的破坏。然而另一方面，日本人却又能够与野生动物共生。在纪录片《野性东京》中，东京这样的超级都市却拥有着数目与种类都极其可观的野生动物。人与生物，是否完全对立？答案当然是否定的。奈良的鹿，长野温泉的猕猴，已经成为了日本旅游的旗帜，也是日本生物多样性保护一个极好的例证。在日本的古典文学中，精怪物语是常见的题材。这也是日本敬畏自然，敬畏万物的一种体现。神道教崇尚万物有灵，认为人类虽为万物灵长，却依旧要对存在于自然中的诸神心存敬畏。在流行文化中，特别是吉卜力工作室、新海诚的动画作品，人类破坏自然环境带来的神罚是常见题材。这也体现了日本对于自然环境破坏、生物多样性破坏的深刻反思。

川端康成在创作《禽兽》前，迷上了饲养鸟类。因此有部分文学批评家认为，此文主人

公原型即为川端本人。但川端在后来解释道,《禽兽》是他在“怀着极端厌恶的心情在一夜之间写就”[ ]。虽说日本人更为偏爱破碎的、毁灭性的美感,追求如风般飘忽而去的审美体验,实则大部分人对生活是充满了爱与希望的。而日本人对于生物多样性的态度,“拯救”才是真正的主旋律。恰如堀辰雄所崇尚的“起风了,唯有努力生存”,在经历种种巨大的破坏之后,日本在生物多样性方面所做的工作是极为瞩目的。日本不仅在2010年确立了全球第一个以十年为期的生物多样性保护目标——“爱知目标”,还设立了基金以资助发展中国家开展生物多样性保护[ ]。2023年,日本政府环境省制定了一份新的国家战略,旨在对日本的生物多样性环境进行保护,而具体措施为到2030年前后,需要在陆地和海洋上各确保30%以上的生物保护区。川端康成的另一名作《古都》,京都近郊繁密茂盛的杉树林是故事发生的主要地点。这得益于日本的“演习林”制度,此制度非常值得邻国借鉴。演习林一般指依托农林牧渔与生物科学类高校的教学实验林场。遍布全国的演习林,是日本森林覆盖率高达68.5%,森林文化得到民众认可,生物多样性得到极大保护的重要因素[ ]。另外,日本在国家公园建设,民众生物多样性科普中也走在世界前列。如更科功《接受不确定、拥抱多样性,让生物学的趣味,丰富你的人生视野》,稻垣荣洋《每个生命都重要——29种隐藏进化奥秘的生物》,都是专业性与趣味性兼具的科普作品。

正如《禽兽》是川端康成最具争议的作品一样,日本在生物多样性保护方面的是非功过也是极为复杂,极具争议性的。生物多样性的保护,特别是在人类栖息地不断扩张的21世纪,已成为无数人共同关注的问题。中日两国,一衣带水,在生物多样性保护方面,更应该通力合作,尊重彼此意愿,才能为东亚甚至整个世界带来更美好的未来。“毁灭”过后,我们应当思考,生物与人如何“共存”,如何相互“拯救”。

---

<sup>1</sup> 川端康成. 藤花与草莓[M]. 叶渭渠,译. 海口:南海出版社,2015.

<sup>2</sup> 黑川雅之. 日本审美的八个意识[M]. 王超鹰,译. 中信出版社,2018.

<sup>3</sup> 小谷野敦. 川端康成传[M]. 赵仲明,译. 杭州:浙江文艺出版社,2022.

<sup>4</sup> 薛达元. 《名古屋议定书》的主要内容及其潜在影响[J]. 生物多样性,2011,19(1):113-119.

<sup>5</sup> 徐诗涛,宋希强,凌鹏等. 日本演习林制度对中国生物多样性保护与国家公园建设的启示[J]. 生物多样性,2018,26(1):96-104.

## 长夜中燃起的希望之灯 ——《献灯使》中的生态危机与救世之光

浙江越秀外国语学院  
インターネットコミュニケーション学院 4年  
林文博

2011年3月11日，日本东北部太平洋海域发生里氏9级大地震，由此引发的巨大海啸对日本东北部地区造成毁灭性破坏，并导致福岛第一核电站核泄漏事故。在天灾与人祸的双重打击下，人们开始重新思考日本的未来，“后3·11文学”[1]也成为了本世纪日本文学的重要现象。其中，多和田叶子于2014年创作的《献灯使》是代表作之一。多和田长期旅居德国，使用日德双语创作，其文学视野之开阔，语言表达之独特，在日德两国文学界都享有盛誉，并被视作最有望入选诺贝尔文学奖的日本作家之一。

### 灾难后的世界：身体异化与身份倒置

《献灯使》讲述的是大灾难降临后的日本实行闭关锁国和言语管制政策，在地理上和文化上都处于完全孤立的状态。由于核辐射的影响，老人活过百岁依旧健朗，孩子们却四肢如章鱼触手般瘫软，连上学的力气也没有。小说的主人公是年过百岁的义郎与他的曾孙无名，身为作家的义郎独自照顾着身体极度虚弱的曾孙。15岁的无名被选为“献灯使”，他承载着众人的希望，即将秘密前往印度的马德拉斯。

多和田在小说中采用了身体异化与身份倒置的设定，将环境污染与社会问题直接表现在人的身体上，营造出一幅反乌托邦的末日景象。书的封面是一只伫立在灰暗背景前的鲸头鹳，纤细的双腿支撑着它庞大的身躯，杂乱的羽毛下一双锐利的眼睛直视前方，仿佛在无声地审判着人类的罪行。书中有一段描写了无名母亲的身体异化：无名的母亲在生下他三天后停止了呼吸，尸体在第五天发生了变异，不仅引起医院的恐慌，连义郎看到孙媳妇的样子也惊愕地捂住了嘴，“记忆中的身体还在不断成长变化。脸中心变尖凸起，变成了嘴，肩膀肌肉隆起，长出了天鹅般的羽毛，不知何时，脚趾变得像鸡爪一样。”[2]85让人不由得联想起封面上的生物。同样的异化也仿佛诅咒一样发生在老人和孩童身上，老人像被剥夺了死亡的权利般健康长寿，而本该茁壮成长的孩童却虚弱无力，“一出太阳皮肤就会干裂，被骤雨淋湿，寒冷便会由皮肤渗入骨髓”，[2]109食物对他们来说也是危险的，“吃了猕猴桃会喘不过气，柠檬汁一沾舌头就会麻痹，不仅是水果，吃了菠菜会烧心，吃香菇就会头晕目眩”[2]56。

身体的异化使得社会身份也发生了倒置——老年人照顾年轻人，年轻人却无力赡养老年人。这样的社会身份倒置让我们很容易联想到当今日本社会中的老龄化和劳动力短缺问题，而身体异化情节更是对环境污染问题的警示。我们也会尝过被蜂蛰过的滋味，光污染、水污染、大气污染打破了生态系统的平衡，导致生物多样性减少，人类健康因此也受到了威胁。

### 无声的反抗：黑暗中的点点烛光

在小说中，人们不仅饱受灾难之苦，还要忍受闭关锁国和言语管制下的极权统治。由于禁止各国商品的进口和本国商品的出口，东京人口逐渐减少走向衰退，而冲绳、北海道一带却因为能够生产水果和粮食有了和政府抗衡的能力。国际交流的中断和社会环境的变化更加直观地体现在语言上，不仅外来语被禁用，不少词汇为了顺应生活习惯和观念的改变也变成了死语言，休息日和节假日的名称也被不断修改，如：“敬老日”和“儿童日”变为“老人加油日”和“向儿童谢罪日”；为避免刺激身体不发育儿童，“体育日”改为

“身体日”，为避免伤害失去劳动能力的年轻人，“勤劳感谢日”成了“只要活着就好日”。食物和语言代替政治和科技成为了最重要之物。安全的食物代表人类作为“自然物”得以延续的保障，语言则代表人类作为“社会存在”的象征。

在孤独与压抑之下，仍有一批人在默默守护和维系着社会的希望，文中称其为“献灯使之会”。作者铺设的这条暗线较为隐蔽，如同点点星光般洒落在文章的各个角落，不为人知的会员们身份各异，分散在四国的 88 处场所。日出前点燃一盏直径 5 厘米、高 10 厘米的蜡烛后再开始一天的工作是他们唯一的共同点，为了日本的希望，他们秘密挑选着合适的献灯使人选，黑暗中燃起的点点烛光是他们无声的反抗。

### 点燃希望的灯火：从“遣唐使”到“献灯使”

“遣唐使”与“献灯使”的平假名都写作“けんとうし”。义郎曾写过一本名为《遣唐使》的小说，但由于使用了过多的外国地名而无法发表，为了自身安全，最终只能将其埋在モノノ墓地。历史小说《遣唐使》的深埋，意味着曾经开放、包容的日本的消失，而绝望中出现的献灯使，则寄托着人类自我救赎的新的希望。无名被选为献灯使是因其生来便对外部世界充满求知欲和好奇心，虽未见过外面的世界，却能理解“地球是圆的”这一概念，并能够用身体感知地球的存在，这也是多和田想向读者传达的身为世界公民应有的特质与责任。

刘慈欣在《流浪地球》中写道：“希望是这个时代的黄金和宝石，不管活多长，我们都要拥有它！”而希望不应仅是埋藏在我们心中，更应该用我们的行动去创造。

希望如沙，悄然流逝，因为坚信，它得以存在；希望如雾，缥缈不定，因为责任，它成为现实。希望是我们留给孩子们的礼物，孩子会知道，孩子的孩子也会知道，在那里，有清澈的海水和碧蓝的天空。

---

#### 参考文献

- [1]秦刚. 日本“后 3·11”反乌托邦小说《献灯使》[J]. 外国文学动态研究, 2021. (02).
- [2]多和田葉子. 献灯使[M]. 東京: 講談社, 2017.

## 吸露之群

### —日本漫画、游戏、纯文学中的生物多样性与人类健康

吉林外国語大学  
中東欧言語学院 3 年  
肖峰

吸露之群这个词来源于《虫师》，它是我最喜欢的日本漫画。按《理解漫画》中的阐释来看，它走的不是像手冢治虫的《火鸟》那样用作品表达艺术媒介本身的路子，即绘出宏大的场面和独具创造性的分镜，而是用媒介表达作者的想法，《虫师》就是这么做的。这部漫画的世界观围绕着虫——一类区别于动植物的虚构生物，与人类的接触、共存和生存竞争的日常生活中展开。整部漫画淋漓着孤独忧郁而温暖的物哀文化，同时又与工细、宏伟的中国式山水画巧妙结合，将人类、虫及其他生物相连结。而吸露之群这一章十分隐喻地谈及了人类健康相关的一些不那么容易说清楚的话题，我觉得用这个做标题很是合适。

看到今年笹川杯的主题，我首先想到的是这几年大火的科普图书《和动物交换身体》，作者是川崎悟司。我是个猎奇人格，看这本书自然觉得贼有意思。书中讲了很多动物形态的人类变体，比如人的肋骨变大围住躯体变成龟壳，牙齿向前突成河马的血盆大口，拉长每一块颈椎变成长颈鹿。这本书真的很有意思，但我一想这是变种人的多样性，并非生物的多样性，也不是讲人类健康，应该不算数。但我觉得会有很多人脑海中闪过的第一本书都会是这个，一些人应该也会想到《美好生活图鉴》系列的《自然图鉴》，这个系列也有点小火。这本书主要讲的是走出家门后如何观察、利用动植物，探索和感悟神奇的大自然与我们人类之间的关系，说来惭愧，我是从《游戏图鉴》知道这个系列的。

日本游戏中的生物多样性也有的聊，比如任天堂的新作《皮克敏 4》。我非常喜欢任天堂的游戏，作为一个游戏大厂，它没有像大多数欧美厂商那样用华丽的演出效果、任务列表和触发剧情的模式把游戏做的越来越像商业电影，任天堂把核心放在玩法本身的部分，创造独属于游戏本身的乐趣。皮克敏这个游戏很贴合这个主题：你降落在一个神秘而富饶的星球上，用一种像是操纵蚁群或是神经元的方式来操纵一种被称为“皮克敏”的生物，通过与不同生性体征的皮克敏配合，见到有趣的奇植或是要对付的异兽，努力的生存下去并收集物资。游戏中有趣的一点是，如果某种特性皮克敏数量过低，你就不能很好的适应某些环境，操控皮克敏达到目的就会变得很艰难甚至无法达成，这会导致你健康或生命的损失。玩好这个游戏你需要有效的利用生物资源，保证皮克敏的生物多样性并可持续利用，这样你才能更好的生存下去。

有关这个主题的游戏我认为做的最好的是中国游戏制作人陈星汉在日本索尼 PS3 平台独占发布的游戏《花》。你化为一朵被风吹散在空中的花朵，途径废土、沼泽、山峰、沙漠等地。你所要做的，就是把自然与生命带去风经过的地方。风吹伊始，触手生春，所到之处花草盛开，而鸟虫齐飞。游戏的终章可谓神来之笔，花朵吹向由钢筋混凝土筑成的城市，你要在一片摧枯拉朽的灰色中染上草绿花红，然后大厦坍塌，万物生长。都市中忙碌的人们纷纷沐浴在阳光之中，摇曳袖尘，洗净铅华。作为第一款也是目前唯一一款被华盛顿特区博物馆收藏的游戏作品，陈星汉的这部作品对敬畏自然做了表达，同时因它带有的鲜明东方禅意美学，不禁让我想到了汪曾祺的散文集《人间草木》。游戏有这种力量，它让我们“亲眼”看到了一朵绽放在荒芜沙漠上的希望之花。

如果你想入门生物多样性与人类健康相关的纯文学，一个优解是从大众评分网站上寻找自己喜欢的书。我比较推荐从豆瓣的“自然与文学的完美结合”和“大自然的书”这两



个书单中检索。外语好的话或者借助 deep1、彩云小译等翻译插件，美国的 goodreads 和法国的评分网站 Senscritique 也是不错的选择，或者你也可以直接从日本的本土网站 booklog 上找。有关这个话题日本纯文学，我一定要聊的一本就是在《在漫长的旅途中》。这本书是我最喜欢的游记，同时也是我非常喜欢的摄影师星野道夫的遗作，没错，就是那个在森林旅行时被熊拍死前还不忘摁下快门的摄影师星野道夫。笔者旅居酷寒的极北大地二十年，对生活在严苛自然环境中的人与动植物，以镜头和执着投注关怀的目光，进行一场回归自然的心灵之旅。

人的一生，总是为了追寻生命中的光，而走在漫长的旅途上。【1】星野道夫捕捉自然界中那些神奇而又转瞬即逝的瞬间，记录下自己在这片土地生活的点滴感悟。大到北极熊和鲸鱼这样的巨型生物，小到树林里的地松鼠、花鸟虫草，那些在这片土地上繁衍生息万年，几乎和这里的历史一样久远的事物。旅居酷寒的极北大地二十年，对生活在严苛自然环境中的人与动植物，以镜头和执着投注关怀的目光，进行一场回归自然的心灵之旅。因为敬畏生命，进而尊重生命。又因为带着感恩和悲悯的心去看待阿拉斯加的一切，于是，无雕琢，景自成。不但目光所及之处更远，整个人也跟着开阔。

---

参考文献：

【1】摘自豆瓣网(日)星野道夫《在漫长的旅途中》书籍简介

## 当熊之神明踱入“人类世” ——读《神明 2011》有感

北京大学  
法学院 修士 2 年  
李想

从风神翼龙到月神闪蝶，从旋齿鲨到旋角羚，从马鹿到马陆，五湖四海，三域六界，过去，现在，未来，无人能数清到底有多少生灵与我们共同分享着这颗美丽的蓝色星球。如今，泛灵论的神光似已褪去，地质学家们正在争论的，是要不要在“全新世”

(Holocene) 之后划分出专门的“人类世”(Anthropocene)。即便争议尚存，这也足以使我们窥见，人类作为万灵之中的特殊存在，正怀着人定胜天之心，使着拔山举鼎之力，深刻地影响着地球环境。

然而，人类之外，生物多样。如果其他生灵能说话，它们会对人类说些什么呢？如果人类并非世界的唯一主宰，举头高悬的神明又会不会保佑人类呢？古今中外，不少文学作

品在尝试回答这些使人如堕五里雾中的问题，看过了中国的神话怪物志，不妨将目光投向友邦日本。

《神明 2011》是一篇日本生态文学小说，也归属于日本“核”文学作品，根植于日本深厚的神道文化。它出自日本作家川上弘美之手，故事既有人类核工业背景，又有诡谲大熊出没，还笼罩着朦胧神性。在《神明 2011》中，熊之神明踱入了“人类世”。2011 年福岛核电站事故发生后，一头会说话的邻居大熊敲开了“我”家的大门，友好地邀请“我”一块儿出门郊游——不穿防护服，在“我们”的家，也就是核事故发生地的附近。

从《神明 2011》中，读者既可以把握到人与神、人与自然、人与其他生物等亘古亘今的永恒矛盾，也可以读出核工业发展与健康环保等更为新鲜的现代议题。而在文学解读意义上，一个核心且有趣的问题是，应当如何理解小说中“熊”的形象，应当如何回答小说结尾的问题——“熊的神灵到底是何方神圣呢？”对此，私以为，熊是万千生灵的代表形象，是介乎人神的中间存在，是拥有自然母亲宽和温迥目光的注视者。熊身上既有人的一面：它仿佛是你我身边的一位朋友，聊天老派，待人体贴，给邻居端上一碗碗荞麦面，使人在交谈中感受到“我和熊之间并非是毫无关联的”；熊身上又有神的一面：明明只是一头熊，却拥有超自然的力量，能说会道，人情洞明，“希望熊的神灵保佑您”。熊作为万千生灵的代表，从森林踱入城市，与人类在患难之际相濡以沫。它宛如自然母亲的化身，渴望和人类拥抱，甚至提出，“如果可以的话，我能为您唱摇篮曲吗？”这哪只是善气迎人，简直要至臻于圣光披露，满照人间了。

可是，当地质史翻入所谓的“人类世”，人类又是如何对待熊，以及熊所代表的自然和其他生灵的呢？2011 年 3 月 11 日，随着地震波澎湃而至，那巍峨的福岛核电站终似醉山颓倒，上万吨污泥浊水倾泻荒流，平等地溺毙着每一个生命。诚然，总有人觉得自然和熊一样，拥有着强健的消化能力：“真羡慕熊啊……如果是熊的话，对锶和铯的抵抗力很强吧。”可健康并不是人类的专属物——即便温柔如熊，也忍不住委婉说道：“是啊，虽然我比人类能承受更多的辐射，但也不是那么耐锶和铯的辐射。”中国的《道德经》有云：“天地不仁，以万物为刍狗。”日本的《神明 2011》恰与此遥相呼应，文中的熊也和人一样，面对着自然和人类双重作用造成的灾难，只能计算着辐射总量，用健康默默承受。《神明 2011》中的熊尚能张口说话，现实中又有多少生灵，只能哑巴吃黄连般咽下那些说不出的苦楚呢？

回到如今的现代关注，我们不得不承认，在有限的条件下，地球仍然是人类和万千生灵共同的唯一家园。在《神明 2011》的结尾，“我”同意了和熊拥抱——“因为熊不经常洗澡，所以身体表面的辐射量很多吧。但是，因为选择在这个地方继续住，所以像那种事情，从一开始便不会在意。”引人深思的是，既然万物与自然永相依偎，“同一个世界，同一个健康”，熊希望熊的神灵保佑人类，那么，人类作为“人类世”的书写者，是否也应该以德报德，更早更多地在意地球家园的健康呢？当人类把科技的赛车驶上高速路猎猎狂飙，就有义务把握好发展的方向盘，莫让那车轮碾坏了野花草。我想，无论是人还是熊，无论是中国还是日本，我们保护地球，爱护环境，守护健康的心是恒久相通的。

这是熊之神明踱入“人类世”，所悄悄告诉我的。

---

所阅图书名称：[日]川上弘美：《神明 2011》。

## 寻物种多元平衡，让草木葳蕤而生 一观《幽灵公主》，思今日时事

澳门大学  
人文学院 2年  
王辰月

枯朽的树干上钻出细小的枝桠，荒芜的山丘也渐渐覆盖上一层喜人的新绿。不久前，炮火和名为“死亡”的气息摧毁了一片片房屋，人类的栖息地没有像森林一样快速地恢复如初，但在山神的润泽下，它们被清脆潮湿的苔藓包裹着，埋入山峦、河谷因受伤而撕裂的罅隙间，成为了自然的一隅……

银幕后的故事落下帷幕，现实中的世界仍在运转。我坐在原位，脑海中思绪万缕，相互勾连着，拉开一幅人与自然的奇妙绘图。

### “山神”与“邪神”——人类同自然抗衡的结局

《幽灵公主》的故事，发生在古时奇幻日本中的室町时代，男主角阿西达卡，来自于隐居山林的虾夷族部落。那时的日本文化深受禅宗影响，关注神明的塑造。

其中，存在一种人面鹿身，神似老僧的神奇生物——麒麟兽。

“麒麟者，仁兽也。”在中国传说中，麒麟代表祥瑞，降临人间后必然引发诸多大事。但电影中的“麒麟兽”不同。

它是山神，代表着客观且淡漠的森林，观看着人类与动物厮杀而无动于衷，对万物一视同仁。它是生与死的综合体，所过之处花木瞬间经历生长到枯萎的过程，轮回不息。辍笔沉吟，庄子在《齐物论》中也曾言道：“天地与我并生，而万物与我为一”，人类和无数生灵在自然面前一律平等，并无贵贱。

但也正是因为生死一体的性质，麒麟兽的“死亡”气息，孕育出了人类惧怕的“邪神”。就连被火药弹丸击穿头颅的普通野猪，也会在死亡后变为覆灭村庄的“诅咒之物”。

自然有造化创生的温和，也有俯瞰众生的冷淡。我愿称之为警钟和真相，也是人类和其他物种打破和平、相互抗衡的结果：

起初的一两头“邪神”能够被人族部落击溃，但当蝴蝶效应开始扩散、多米诺骨牌开始

崩塌……麒麟兽的伤痕在森林中蔓延，灭亡，便会无差地吞并掉森林、海洋、山川……还有我们。

亿万年后，自然在轮回中复生，而人类存在过的痕迹却被永久地掩埋。

### 森林“拯救者”——多元又怪诞的生物族群

宫崎骏老先生的作品中，充满了千奇百怪的生灵。有《龙猫》里呆萌的灰尘精灵，《风之谷》中五彩斑斓的孢子植物，以及几乎每一片“宫崎骏森林”中都存在的小树精。或许，男主角阿西达卡就是宫崎骏和无数地球村同胞们的化身，他们、我们，都在寻找着与森林的“神灵”化解敌意和冲突的方法，以求解除邪神的诅咒。奈何个人的力量过于渺小，很难左右那些覆盖向山川湖海的魔爪。

人类化解危机的方式叫和平共生，而大自然则依靠时间长河里的生命周期。

若是将《幽灵公主》中，“麒麟兽”复活森林的奇幻故事现实化，你便会看见生物学领域里生态系统令人叹为观止的伟力——一次生演替和恢复力稳定性。

此二者，皆由物种丰富度决定，由生物多样性维持。生态系统多样性、物种多样性和基因多样性，共同编织起一面坚韧且难以打破的大网。

我国建设的红树林、热带雨林等自然保护区，桑基鱼塘等经营方式，也正是基于自生、循环、协调、整体的基本原理，探索多样生物织成的绝妙网络，最后，运用人类的智慧创造出顺应自然的共生发展。

同样的，日本公开支持着将传统生态思想与现代生态科学有机结合的理念，例如基于生态系统的灾害风险减缓、基于生态系统的气候变化适应……

站在人类大同的角度，我们都心知肚明：森林重要的“拯救者”，正式多样的生物本身。

### 于自然演替中生生不息——万物枯荣引发的反省

当今时代，我们不得不考虑到科技发展、资源利用、人口增长等等，就像黑帽大人（幻姬）为了族人的工业得以发展，必须想办法侵占森林、筑起高墙。

《幽灵公主》这部电影诞生于1997年，联合国《生物多样性公约》生效的第四年。而今天，公约生效的第三十年，“人”的力量不再渺小，维护与自然和平发展的行动一点点聚沙成塔。

《名古屋议定书》期望遗传资源利益的收益能够得到公平和公正分享；“针对基于自然的解决方案（Nature-based Solutions, Nb S）”寻求经济社会与生态之间的平衡；《中国的生物多样性保护》白皮书秉持着人与自然和谐共生。

你提出，我遵行；我呼吁，你实施。

猎杀“麒麟兽”的行为在今日会被万夫所指，会被指责控诉；所有的“阿西达卡”也都会毅然地挺身而出，力守“幽灵公主”所捍卫的家园。

我们都应明白，人类“食物链顶端”的位置并不代表先天被赋予了征服的权柄，而是一个脆弱易碎的“王座”。我们有能力依靠富饶的自然资源创造更加美好的家园，可是，但凡

食物链中有某个环节垮塌，我们也将一并坠落。

生物多样性的保护和可持续发展，是我们在地球生态圈面前展现的尊重与平等，是一种多元平衡的共生理念。

思绪回迁，我无意间想起中国地质学家丁仲礼先生，曾在采访中说过的一句话：“这不是人类如何拯救地球的问题，而是人类如何拯救自己的问题。”

---

附注：

《幽灵公主》一宫崎骏

《风之谷》一宫崎骏

《龙猫》一宫崎骏

## 通往绿色未来的荆棘之路

華東師範大學

中國言語文學科 1年

許馨月

保护生物多样性、维护生态系统平衡对于人类健康美好的生活至关重要，古人诗文中蕴藏的生态理念和生态智慧值得我们学习和借鉴。在强调生物多样性、绿色生态优先、构建和谐共生社会的今天，我们依然可以从日本古代和歌中找寻到先贤关注四季风物、寄托情感的璀璨智慧。

《万叶集》是日本古典文学的代表之作，收录了从4世纪到8世纪大约4500首和歌，可以说它成就了日本文化基调和感性之源。当时日本尚未创造自己的文字，全文借用汉字写成即万叶假名，分为杂歌、相闻、挽歌等，包括了公共、私人两个角度的书写。而日本对于中国文化的学术研究可以追溯到我国三国时期，万叶诗人不可避免地受到中国《诗经》、《文选》、《古文珍宝》等的影响，主动或潜移默化地模仿学习中国对于自然生物的审美角度，其生态精神也有所相通。

早期和歌多由天皇一族创作，以宫中仪式和狩猎行幸等为主题，与日本中央集权壮大的动荡时代紧密联系。此时的自然风物连接着天皇之尊和神灵祭祀，人对待自然保持着朴实的敬畏之情。

愿我大和国，群山紧相连。惟有香具山，秀美非一般……  
平原炊烟绕，海洋鸥鸟欢。美哉秋津岛，大和多壮观！[1]

(卷一·2)

这首和歌是《天皇登香具山望国之时御制歌》，描绘了登临大和三山之一的香具山所见壮阔之景，站在秀美的高山上看国土平原丰饶，想象海洋上鸥鸟飞翔。尽管在山上一眼看不到海，但是对海及海洋生物的勾勒留念真实保留在古代日本的歌吟中。

然而在游览山川时作此和歌，舒明天皇想要暗示的是在我的统治下可以万物欣欣向荣，百姓安居乐业，两者彼此相承。既是略带委婉的自我夸赞，也是用和歌表示对民生的关心和美好的愿望，相信言语的力量，即佐佐木幸纲所说“宿有言灵的和歌”[2]。这也是属于春天的文化仪式，观赏国家，称为“国见”，国家和人民的命运都与自然紧密相连。

天皇一统的盛世出现了职业歌人，代表人物柿本人麻吕。天智天皇推行“大化改新”，确立了以天皇为国家中心，和歌也顺应时局，将天皇逐渐放于自然神地位之上。

大王乃神；天云之中雷丘上，建户作官寝。

(卷三·235)

高照日之子，皇威盖八方。并轡田猎出，猎路小野场。豕鹿屈膝拜，鹑伏环绕忙。

豕鹿拜，鹑伏绕，惶恐侍君王……

(卷三·239)

这一阶段的和歌可以明显看出天皇征服自然的理念，人和豕鹿、鹑伏等生物都臣服于天皇至高无上的权威，风雨雷电成为奉贺天皇的媒介，同时期李白曾评价屈原“屈平辞赋悬日月，楚王台榭空山丘”[3]，两者对自然的挪用有异曲同工之妙。但另一方面也体现出人为赋予动物以通灵之性，与王安石诗中“一水护田将绿绕，两山排闥送青来”[4]极相似，体察感知出万物皆有灵。

人慢慢意识到自己力量的强大，但是内心知道无法真正战胜自然，便以感性的方式塑造出凌驾于万物的天皇神的形象，迎接未知的恐惧。因为强者懂得尊重，不会刻意将彼此放在不平衡的位置上，用言语获得服从取胜。

平城京建都后，都市社会经济繁荣，平安时期的歌人们拥有更多自由发挥的空间。他们开始纯粹地观察万物，由宫廷场所回归到原始的自然秩序中，集体意识的感动逐步转化为个人对于自然的情感流露。

众盼水晶花；即使花飘零，怎能忘，杜曾来鸣。

(卷八·1482)

我家山冈，雄鹿来鸣；胡枝子刚绽放，访妻声声。

(卷八·1541)

水晶花和杜鹃、胡枝子和鹿是日本文学中极具特色的生物组合，出现频次也比较高。

胡枝子就是秋萩，野有鹿鸣，又称鹿鸣草，与中国呦呦鹿鸣、嘉宾宴饮所指不同，这里的“萩鹿组合”引申的是爱情，萩为鹿之妻。

歌人欣赏自然，体悟自然，又将自己思念妻子的真挚情感融入自然，和歌记录下了多种多样的生物。《万叶集民俗事典》统计显示，在《万叶集》里咏叹的植物有 150 种以上，与植物相关的和歌近 2000 首；咏叹的动物有 63 种，相关和歌有 698 首。[5]这也反映当时人们的乡愁、情思、友谊借对大自然的赞美吟咏抒发出来。

歌人在欣赏原始自然意趣的同时，又产生了新的美学方式，即人的活动如折花、宴饮加入到自然美的创造中。中西进说“这遵循了所谓的‘攀折美学’，意在追求一种‘游戏’的精神”[6]，采花、折枝、园艺加入了人的主观审美，并非破坏自然，而是一种新的共处模式。最为典型的是大伴旅人与友人模仿王羲之流觞曲水而办的梅花宴，梅花宴饮上的组诗体现日本歌人对六朝名士的仰慕，但削减了思辨意味。

院中梅，春光绽枝头；怎能独自观赏，送此春日昼。

(卷五·818)

宜折梅翠柳；花满头，畅饮酒，即使零落后。

(卷五·821)

欣赏花开之华丽，也赞美花落之绚烂。这种“眷恋花、思念鸟”[7]的精神成为人的健康幸福和生物多样发展美美与共的纽带。

淡海之湄，夕彼千鸟。以和歌为重要载体，万叶歌人抒发的是对自然千回百转之情，是对生态平衡的理解和珍视，万物对人而言不仅是生存的力量，还是精神的寄托。面对当下严峻的环境问题，更应铭记前人留下的智慧财富，从生态文化的窗口，或许有利于思考生态系统服务与满足社会需要、生物多样性与人类健康之间的平衡关系。

---

#### 参考文献

- [1] (日)大伴家持等编；赵乐姓译. 万叶集[M]. 南京：译林出版社，2002. 04.
- [2] NHK. 言霊の宿る歌[EB/OL]. [2023年9月16日].  
[https://www.nhk.or.jp/meicho/famousbook/32\\_manyoushu/index.html](https://www.nhk.or.jp/meicho/famousbook/32_manyoushu/index.html).
- [3] 黄海著. 律诗与新诗合集[M]. 广州：广东人民出版社，2012. 11.
- [4] 陈璧耀编著. 唐宋诗名句品读[M]. 上海：上海社会科学院出版社，2008. 04.
- [5] 稻冈耕二编. 万叶集事典. [M]. 日本：学灯社，1994.
- [6] (日)中西进著. 《万叶集》与中国文化[M]. 中华书局，2007.
- [7] (日)中川幸广著. 《万叶集卷十札记—游玩的精神》[J]. 上代文学，1973(10).

## “跳出人类中心主义重新理解生物多样性” ——读本川达雄《生物多样性》有感

上海交通大学  
文化創造産業学部 修士 2 年  
常竣斐

2010 年，《生物多样性公约》缔约方大会的第十次会议在日本爱知县举办，会上提出的 20 项生物多样性目标被称为“爱知目标”。遗憾的是，这些目标无一实现。

目标中第一条即是，到 2020 年人们认识到生物多样性的价值，了解采取哪些措施保护生物多样性。然而，过去十年中听说过生物多样性并了解这一概念的人的比例虽然明显增加，但离目标实现仍然遥远。根据世界自然基金会 2021 年在中国的调查，91%的受访者都听说过生物多样性，但只有约 33%的受访者了解其具体含义。

公众难以理解生物多样性，生物学家同样感到为难。生物学家本川达雄就坦率地承认，“说到生物多样性，自己就是个门外汉”。因此当有人请他谈谈生物多样性时，这个专门研究非食用海参的生物学家以为，正是因为自己的研究领域非常冷门，才会让人误以为自己了解各种生物。

本川达雄出于学者的责任感，从海参的水下世界里走出来，接受电视采访，发表音乐专辑，还出版了《生物多样性》等科普著作。他将自己对人类社会的理解和生物学专业知识融合在一起，跳出了人类中心主义的窠臼，从生物的起源与本质重新诠释了生物多样性的意义。

在本川达雄看来，老鼠、大象和其他生物都有自己的“世界观”，以人类为中心的世界并不存在。生物脱离不开时空，因为身体是空间的，寿命是时间的，身体大小与寿命长短也紧密相关。老鼠只活几年，大象却拥有近百年寿命，两者体型差距更是惊人，这意味着它们的生命历程与时空感知完全不同。其他生物没有像人类这样的“世界观”，但它们的“世界观”一定会体现在生活方式和身体构造中。如果人类以自己为中心去理解其他生物，那么连最基础的农牧业都不可能发展起来，更遑论生物学等现代学科，这最终会损害到人类本身的健康发展。

为了说明生物多样性的内在价值，本川达雄重新定义了“我”的概念。个体生物的“我”依靠繁衍后代构成物种整体的“我”，所有人类、老鼠或是大象，其实都是一个“我”。由于所有生物有着相同的起源，归根结底所有生物都属于“我”，自然都需要得到保护。人类中心主义不攻自破。

为什么说个体生物的“我”依靠繁衍后代构成物种整体的“我”？本川达雄认为物种起源理论可以解释一切，时空正是其中的核心概念。他提出，生物的活动空间与生命长度都极为有限，最重要的行为莫过于繁衍后代。个体的我只在广大的时空中停留一瞬，不断



延续的物种才真正长期生活在这个世界上，换言之，这才是作为生物的“我”。根据物种起源理论，地球上所有的生物都有相同的起源，其实都是“我”的一部分。生物从共同的祖先开始繁衍，经历了基因突变和自然选择，在适应生态环境的过程中具有了多样性，最终构建了整个地球生态系统，人类只是其中一个分子而已。保护生物多样性，其实也是在保护人类自己的健康。

除抽象的理论构建外，本川达雄还给出了实际的建议，他呼吁人们在保护生物多样性时，应当学会和自己讨厌的生物相处。实践已经证明，仅保护那些受到人们喜爱、或者对人们有价值的生物，难以改善生物多样性恶化的现状，这仍然是一种人类中心主义的视角。大熊猫就是很好的例子，中国政府和公众从政策和情感上都高度重视大熊猫，大熊猫的野生种群数量也越来越多。按理说，大熊猫应该能够唤起人们对更多濒危物种和生物多样性的持续关注，但中国生物多样性的整体情况实际上仍在恶化。对生物多样性的关注，最终还是需要回到我们身边的每一个物种上来。

人类的发展导致了生物多样性的恶化，但人类也有能力遏制住这一恶化的进程。今年年初，日本福岛大学等研究发现，奈良公园的鹿群拥有独立的基因型，它们从1000多年前开始不再与其他鹿群交流，尽管周边地区的鹿群因人类狩猎和开发而灭绝，但是这些梅花鹿却因为人类的保护而存续下来。既然梅花鹿可以生存并出现新的基因型，那其他生物一定也可以。

在当下的时间节点，许多人在快节奏社会中感到生理与心理的不适，转向大自然寻求安慰。个体的“我”在受损时，可以在所有生物构成的“我”那里得到修复，这也许正是唤醒普通人保护生物多样性的信念的绝佳方式。

在网络和书本上的理论永远不如切身实地的实践，本川达雄也是在潜水过程中坚定了生物多样性的信念。当我们稍微远离一点城市，走进附近的湿地与森林，在江河湖海边感受，面对扑面而来的生物，也许就能重新找到身心的和谐和睦。

---

注释：

- [1] 作者在撰文过程中主要阅读的书籍为日本生物学家本川达雄所著的《生物多样性》《大象的时间，老鼠的时间》。

参考文献：

- [1] 本川达雄. 生物多样性[M]. 北京: 新星出版社, 2020.
- [2] 本川达雄. 大象的时间, 老鼠的时间[M]. 海口: 南海出版公司, 2017.
- [3] 生物多样性公约秘书处. 决策者摘要(2020年)第五版《全球生物多样性展望》[R]. 蒙特利尔: 生物多样性公约秘书处, 2020.
- [4] 世界自然基金会. 意识、态度、行为—中国公众生物多样性认知调查报告[R]. 北京: 世界自然基金会, 2021.
- [5] 陈佳琳. 保护大熊猫, 还须做什么[J]. 中国新闻周刊, 2023, (21).

[6]钱铮. 日本奈良公园的鹿拥有独立基因型[N]. 中国科学报, 2023. 02. 02.

## 再拾慈爱—朱鹮前后七十年

中国传媒大学  
广告学院 1年  
劉子熙

当最后一批朱鹮徘徊在佐渡上空时，只有那里的当地人真真切切地明白，这种曾经遍布日本全境的火色精灵将要去而不返。然而随着这可爱可哀的精灵一同在那个时代里日渐稀少的东西，或许需要几十年才能在人们心中清晰。

很晚，但至少尚未太晚：小林照幸《朱鹮的遗言》如巨石落水溅起波澜—我想这不是因为朱鹮，至少不只是因为朱鹮。占据更多原因的，是半个多世纪后的我们在朱鹮的羽毛之下找到的、应当属于人类的慈爱与悲悯。

### 日渐冷漠

回到朱鹮吧—她的英文名字叫做 Nipponia Nippon，译作“日本的日本鸟”。作为在昭和初年被列入“自然纪念物”行列的国鸟，朱鹮的濒危困境似乎难以理解。美丽、灵动而备受关注，这样的生物怎么会淡出人类的视野并日渐濒危？或许是战争分散了人们的精力，又或许工业的成就使目光更多集中在战舰、机车与工厂之上，而对她不加关注。其结果是，当昭和二十年人们再次关注她时，曾经遍布扶桑的空中舞者只能在佐渡县一方得以存留。

彼时的日本，曾以雄踞东亚的姿态，在短短数十年间追赶上了西方列国数百年的辉煌成就，然而“一切皆有代价”。工业的发展使人沉醉麻木，使大众惯于对生态破坏不加过问、不置一辞。朱鹮栖息地的消失给朱鹮带来灭顶之灾。此后的数十年，这种麻木不但未尝消除，反而日渐严重。为了追逐产业社会的膨胀发展，日本曾牺牲甚多。朱鹮只是开始，越来越多的生灵成为产业文明的代价，被“绞死在齿轮之间”。直到刀刃割向人们自己，大众才意识到并非一切都可牺牲。消失的不只朱鹮，也不局限于生态，还有人类自己的健康与性命。是枝裕和在《云没有回答》中记录着重金属污染带来的水俣病—它曾一度成为污染疾病的代名词，严重的汞污染让当地人神志不清、孩童畸形。无独有偶，神奈川的污染始于无人关注的鱼类死亡，却最终因神奈川的居民患上骨骼碎裂的痛痛病而为世人所知。我们以为抛弃了生态与万物的福祉就能换来人类之福，却未想到无论是万物亦或灵长，最终都险些成为工业文明的燃料。

是枝裕和将这种淡漠抽象成了“抛弃福祉的时代”，但被抛弃的远不止万物生灵福祉，

还有本能的慈爱、人类的性命。这或许也是我们之所面临——工业化中的日本国民曾经一度以冷漠取代慈爱，滋长的淡漠使那个从山川、青林与飞鸟中走来的日本文明蒙蔽于工业的烟尘——一直到这些淡漠最终带来对人类自己的灾难。是枝在《云没有回答》中发问：我们已经承受多少？将要承受多少？能够承受多少？然而就像它的书名那样，在那个年代这些问题泥牛入海，云没有回答，大众也依旧沉默。

## 重拾慈爱

在用生态换取速度的日子过去后，我们静下心来，重新与曾被伤害的生灵相处，唤起根植于灵魂深处的慈爱与悲悯。神道教坚信万物有灵，这或许正是对生态世界的一种自发的、根植于文化深处的关照，是从纪元二千六百年前就有的、对万物生灵的理解、博爱与悲悯。无需告诉每个人生态有多重要，只需唤醒那些被工业文明压制的慈爱。这是找回博爱的过程——但又何尝不是从辉煌又黯淡的工业文明中自救的过程？古老的东方文化中天生蕴藏着一种对自然的敬畏、关爱与体悟，尽管无情的产业社会使之暂时麻木，但当神社外的乌鸦飞过，当古寺旁的鹿儿轻鸣，那潜藏的慈爱就悄悄地苏醒，为自己带来新生——“这既是赎罪，也是祈愿”，小林照幸一语双关。

佐渡县的居民自发成立了佐渡朱鹮爱护会，帮助繁育和保护朱鹮幼鸟：当地的店铺以朱鹮命名吸引顾客，又将盈利中可观的部分捐献给保护组织。当地政府放弃了许多工业开发，为朱鹮留下一线生机。此后日本的许多艺术作品也以独特的形式展现了重拾慈爱后崭新的生态观念——在《风之谷》中，公主与王虫的理解最终让风之谷幸存，成为人类的火种曙光，象征着试图征服与剥削自然的巨神兵则最终在广阔的金色原野上腐烂，成为那个“产业文明”的墓碑。而更具象征意味的《千与千寻》里，女孩以纯洁的形象反对父母大肆盗取“神的食物”（自然资源），最终将父母从神的惩罚中救出，以本真的善意与慈爱，为自己和他人带来救赎。

同居于东亚的两个大国——日本与中国——共享着高度相似的发展路径：打开大门、学习西方、并用数十年追逐列强数百年的成就，却也都面临着慈爱的日渐丢失。在朱鹮的保护上，中国曾以东洋为师，让中国朱鹮得以成功被保护幸存、繁衍生息。如今中国朱鹮腾跃于泽，飞舞于天，甚至东渡重洋，再续佐渡的“神鸟之光”。而在朱鹮之后，北海道的丹顶鹤得到全体日本国民的关注，在保护中对北海道的池泽恋恋不舍，甚至一度成为留鸟。两个东方文明拾起自古传承的生态慈爱，在合作与学习中为生态保护助力至今。

距离最后一只佐渡朱鹮离去已近四十年之久，对于悄然离去的一种生灵，我们已然无能为力，至少在朱鹮留下遗言四十年后，我们正日渐重拾我们的慈爱与悲悯。此刻奈良的鹿

呦呦而鸣，扶桑树下太阳东升，而东亚隔海相望的两国也正一步步携手走出彼此都经历过的“抛弃福祉的时代”，走入与生态共享福祉的新纪元。

参考：

- [1] 《朱鹮的遗言》 [日]小林照幸
- [2] 《云没有回答》 [日]是枝裕和
- [3] 《可是…抛弃福祉的时代》 [日]是枝裕和

## 这条小鱼在乎

浙江越秀外国语学院  
東洋言語学院 3年  
边筱悦

当河流不再笑着流淌，鲜花不再芳香，我们唯一学会面对的竟然是遗忘。——题记

你见过无边夜幕缀满星星的夜空吗？你听过森林深处百鸟争鸣的乐曲吗？你还记得在清澈见底的小溪里与好友嬉戏的场景吗？这是我们记忆里的自然，也是我们回不去的曾经。

当踏足海岸，望着汪洋大海，我仿佛感受到了它的无垠与博大。然而，当我细细聆听波涛汹涌之间，却也不禁怀疑起这片蔚蓝海洋的真正面貌。在人类的快速发展和经济繁荣的背后，海洋却默默承受着严重的污染。无数次的废弃物、污水和化学品被不加思索地排入海洋，摧毁着海洋生态系统的平衡，对海洋生物群体造成了极大的威胁。

《污染海域》一书所描述的情况是这样的：锦浦地区遭受了严重的生态污染，导致当地的鱼类资源濒临灭绝，而当地渔民为了维持生计，被迫捕捞被污染的鱼类资源。在生存压力下，他们被迫否认当地生态已经受到污染的事实，并向当地环保部门请求出具无污染证明来保证他们捕鱼的收益。这个情境揭示了受到环境公害影响的渔民所面临的悲哀。这既令人同情又让人愤慨。海洋，无垠的蓝色大地，孕育着无数奇妙而神秘的生命。然而，人类在追求自身发展的过程中过度利用这些宝贵资源，海洋正面临着严重的威胁。这部小说以鲜活的笔触勾勒出了一个充满悲情的海洋世界，揭示了人类对自然环境的无止境掠夺，同时也引发了我对生态环境保护与人类未来的深思。

故事中的海洋被人类无节制的污染摧毁了。面对这一情景，我深感痛心与悲愤。我们人类作为地球的主导者，负有保护自然环境的责任，然而，在追逐繁荣与利益的同时，我们却忘记了自然的宝贵性与脆弱性。如今，海洋遭受到巨大的威胁，海洋生物数量锐减，整个生态系统处于动荡与衰退之中。这让我深刻反思：我们的贪婪、无知和短视行为何时才能停止？

为此我们又将付出多大的代价？

这部小说让我认识到了生物多样性对于人类的重要意义。这不仅仅是因为它们是世界上独一无二、不可替代的存在，更因为它们与人类生活息息相关。海洋是我们生活中重要的资源来源，为数不尽的物种提供了食物、药物和其他必需资源。而当我们不断破坏海洋生态系统时，我们也在不断放大生物多样性减少对人类健康的影响。

我们每一个人都有责任采取行动来保护环境和生物多样性。我们可以从身边的小事做起，例如减少使用塑料制品、做好垃圾分类和回收、推广可持续的消费方式等。同时，各国政府和国际组织也应该加强监管和立法，制定更加严格的环境保护政策和措施，引导社会朝着可持续发展的方向努力。

保护生物多样性至关重要。除了反思我们自身的行为，我们也应积极行动起来，引导更多人的关注和参与。故事中的主人公们在面对这一巨大挑战时勇敢地站了出来，并通过各种方式传递着环保的理念。因此，我认为通过教育、媒体和社会组织的力量，我们可以进一步扩大环保事业的影响力，唤起更多人对生态环境的关注和行动。

这部小说让我认识到，我们与自然界是密不可分的。我们不能忽视、漠视或违背自然界的准则和法则，而应与其和谐共生。保护海洋生态系统，恢复生物多样性，维护我们地球家园的稳定与健康，不仅仅是一种责任，更是确保人类可持续发展的必然选择。

被污染后海洋的遗憾是什么？是靠海吃饭的渔民望着大海，清楚地意识到这些鱼就算再过10年、20年也卖不出去了；是曾经作为文人情怀寄托的海洋，或许无法再有包容性；是曾经我们以为是束缚海洋生物们的海洋馆，如今却成了它们的庇护所。是的，这条小鱼在乎，那条小鱼也在乎，千千万万条小鱼都在乎，但没有人经过它们的同意就破坏了它们的家园。生命起源于海洋，地球婴儿爬了出来，但脐带依旧绕着脖子，远行的雨会落在每一个人的肩膀上。《污染海域》引发了我内心深处对人类与自然之间关系的思考，同时也激发了我的环保意识。我希望，通过个体和社会的努力，我们能够共同建立一个更加可持续且美好的未来。

海洋环境保护不仅仅是一项责任，更是一种情怀。我们应该从内心深处爱护海洋，尊重自然，才能意识到它的珍贵和必要。让我们的行动成为一首歌，唱响大海的旋律；让我们的心灵成为一片海洋，容纳着对未来的希望。唯有通过共同努力，重拾对海洋的敬畏之心，才能保护这片蓝色星球的未来。海洋污染不仅仅是一个环境问题，更是对人类普遍价值观的考验。让我们以行动对海洋做出最诚挚的道歉，也用行动来弥补我们的过错。只有这样，我们才能让下一代拥有一片更加美丽、洁净的海洋，在与大自然的和谐相处中感受生命的美好与幸福。

---

阅读图书：《污染海域》

出版社：志文出版社